

遠野物語

柳田国男

青空文庫

この書を外国に在る人々に呈す

この話はすべて遠野とのおのの人佐々木鏡石君より聞きたり。昨明さく治四十二年の二月ごろより始めて夜分おりおり訪たずね来たりこの話をせられしを筆記せしなり。鏡石君は話上はなしじようず手にはあらざれども誠実なる人なり。自分もまた一字一句をも加減かげんせず感じたるままを書きたり。思うに遠野郷ごうにはこの類の物語なお数百件あるならん。我々はより多くを聞かんことを切望す。国内の山村にして遠野よりさらに物深き所にはまた無数の山神山人の伝説あるべし。願わくはこれを語りて平地人を戦慄せしめよ。この書のごときは陳ちんし勝ようせい呉いこう広のみ。

昨年八月の末自分は遠野郷に遊びたり。花はな巻まきより十余里の路

上には町場^{まちば}三ヶ所あり。その他はただ青き山と原野なり。人煙の稀少^{きしょう}なること北海道石狩^{いしかり}の平野よりも甚^{はなは}だし。或いは新道なるが故に民居の来たり就^つける者少なきか。遠野の城下はすなわち煙花の街なり。馬を馭亭の主人に借りて独^{ひと}り郊外の村々を巡^{めぐ}りたり。その馬は黔^{くろ}き海草をもつて作りたる厚^{あつ}総^{ぶさ}を掛^かけたり。虻^{あぶ}多きためなり。猿^{さる}ヶ石^{いし}の溪谷は土肥^こえてよく拓^{ひら}けたり。路傍に石塔の多きこと諸国その比を知らず。高処より展望すれば早稻^{わせ}まさに熟^{ばんとう}し晚^{はなざか}稲は花盛りにて水はことごとく落ちて川にあり。稲の色合^{いろあ}いは種類によりてさまざまなり。三つ四つ五つの田を續けて稲の色の同じきはすなわち一家に属する田にしていわゆる名^み処^よの同じきなるべし。小字^{こあざ}よりさらに小さき区域の地名は持主

にあらざればこれを知らず。古き売買譲与の証文には常に見ゆる
 所なり。附馬牛つくもうしの谷へ越ゆれば早池峯はやちねの山は淡く霞かすみ山の形は
 菅笠すががさのごとくまた片仮名かたかなのへの字に似たり。この谷は稲熟する
 ことさらに遅く満目一色に青し。細き田中の道を行けば名を知ら
 ぬ鳥ありて雛ひなを連れて横つぎりたり。雛の色は黒に白き羽まじりた
 り。始めは小さき鶏かと思ひしが溝みぞの草に隠れて見えざればすな
 わち野鳥なることを知れり。天神の山には祭ありて獅子踊ししおどりあり。
 ここにのみは軽く塵ちりたち紅あかき物いささかひらめきて一村の緑に映
 じたり。獅子踊というは鹿しかの舞まいなり。鹿の角つをつけたる面を被かぶり
 童子五六人剣を抜きてこれとともに舞うなり。笛の調子高く歌は
 低くして側かたわらにあれども聞きがたし。日は傾きて風吹き酔いて人呼

ぶ者の声も淋しく女は笑い児は走れどもなお旅愁をいかんともする能わざりき。あた孟蘭盆うらぼんに新しき仏ある家は紅白の旗を高く揚げて魂を招く風あり。たましい峠とうげの馬上において東西を指点するにこの旗十数所あり。村人の永住の地を去らんとする者とかりそめに入りこみたる旅人とまたかの悠々たる靈山とを黄昏たぞがれは徐おもむろに來たりて包容し尽したり。遠野郷には八ヶ所の觀音堂あり。一木をもつて作りしなり。この日報賽ほうさいの徒多く岡の上に灯火見え伏鉦ふせがねの音聞えたり。道ちがえの叢くさむらの中には雨風祭あめかぜまつりの藁人形わらにんぎょうあり。あたかもくたびれたる人のごとく仰臥ぎようがしてありたり。以上は自分が遠野郷にてえたる印象なり。

思うにこの類の書物は少なくも現代の流行にあらず。いかに印

刷が容易なればとてこんな本を出版し自己の狭隘きょうあいなる趣味をもつて他人に強いんとするは無作法ぶさほうの仕業しわざなりという人あらん。されどあえて答う。かかる話を聞きかかる処ところを見てきてのちこれを人に語りたがらざる者果はたしてありや。そのような沈黙にしてかつ慎みつつし深き人は少なくも自分の友人の中にはあることなし。いわんやわが九百年前の先輩せんぱい『今昔物語』のごときはその当時においてすでに今は昔の話なりしに反しこれはこれ目前の出来事なり。たとえ敬虔けいけんの意と誠実の態度とにおいてはあえて彼を凌しのぐことを得うという能わざらんも人の耳を経ふること多からず人の口と筆とを倩やといたること甚だ僅わずなりし点においては彼の淡泊無邪気なる大納言殿いなごんのかえつて来たり聴くに値せり。近代の御伽百物語おとぎひやくものがたり

の徒に至りてはその志こころざしやすでに陋ろうかつ決してその談の妄誕もうたんにあ
らざることを誓ひそいえず。窃ひそにもつてこれと隣を比するを恥とせり。
要するにこの書は現在の事実なり。単にこれのみをもつてするも
立派なる存在理由ありと信ず。ただ鏡石子は年わずかに二十四五
自分もこれに十歳長ずるのみ。今の事業多き時代に生まれながら
問題の大小をも弁わえず、その力を用いるところ当とうを失えりという
人あらば如何いかん。明神の山の木兎みみずくのごとくあまりにその耳を尖とがら
しあまりにその眼を丸くし過ぎたりと責せむる人あらば如何。はて
是非もなし。この責任のみは自分が負わねばならぬなり。

おきなさび飛ばず鳴かざるをちかたの森のふくろふ笑ふら
んかも

題目（下の数字は話の番号なり、ページ数にはあらず）

地勢

一、五、六七、一一一

神の始

二、六九、七四

里の神

九八

カクラサマ

七二―七四

ゴンゲサマ

一一〇

家の神

一六

オクナイサマ

一四、一五、七〇

オシラサマ

六九

ザシキワラシ

一七、一八

山の神

八九、九一、九三、一〇二、一〇七、一〇八

神女

二七、五四

天狗

二九、六二、九〇

山男

五、六、七、九、二八、三〇、三一、九二

山女

三、四、三四、三五、七五

山の靈異

三二、三三、六一、九五

仙人堂

四九

蝦夷の跡

一一二

塚と森と

六六、一一一、一一三、一一四

姥^{うば}神

六五、七一

館^{たて}の址

六七、六八、七六

昔の人

八、一〇、一一、一二、二一、二六、八四

家のさま

八〇、八三

家の盛衰

一三、一八、一九、二四、二五、三八、六三

マヨイガ

六三、六四

前兆

二〇、五二、七八、九六

魂の行方

二二、八六―八八、九五、九七、九九、一〇〇

まぼろし

二三、七七、七九、八一、八二

雪女

一〇三

川童

五五―五九

猿の経立ふったち

四五、四六

猿

四七、四八

狼^{おいぬ}

三六―四二

熊

四三

狐

六〇、九四、一〇一

色々の鳥

五一―五三

花

三三、五〇

小正月の行事

一四、一〇二―一〇五

雨風祭

一〇九

昔々

一一五
—
一一八

歌謡

一一九

一 遠野郷とおのこうは今の陸中上閉伊郡かみへいの西の半分、山々にて取り囲まかこれたる平地なり。新町村しんちようそんにては、遠野、土淵つちぶち、附馬牛つくもうし、松崎、青笹あおざさ、上郷かみこう、小友おとも、綾織あやおり、鱒沢ますざわ、宮守みやもり、達曾部たつそべの一町十ヶ村に分かつ。近代或いは西閉伊郡とも称し、中古にはまた遠野保とおのほとも呼べり。今日郡役所のある遠野町はすなわち一郷の町場まちばにして、南部家なんぶけ一万石の城下なり。城を横田城よこたじようともいう。この地へ行くには花巻はなまきの停車場にて汽車を下り、北上川を渡り、その川の支流猿ヶ石川さる いしがわの溪たにを伝つたいて、東の方へ入ること十里、遠野の町に至る。山奥には珍しき繁華の地なり。伝えいう、遠野郷の地大昔はすべて一円の湖水なりしに、その水猿ヶ石川と

なりて人界に流れ出でしより、自然にかくのごとき邑落ゆうらくをなせしなりと。されば谷川のこの猿ヶ石に落合おちあいうもの甚はなはだ多く、俗になないやさき七内八崎ありと称す。内ないは沢または谷のことにて、奥州の地名には多くあり。

○遠野郷のトーはもとアイヌ語の湖という語より出でたるなるべし、ナイもアイヌ語なり。

二 遠野の町は南北の川の落合おちあいにあり。以前は七しち七しち十じゅう里りとて、七つの溪谷おのおの七十里の奥より売ばい買ばいの貨物を聚あつめ、その市いちの日は馬千匹、人千人の賑にぎわしさなりき。四方の山々の中に最も秀ひいでたるを早池峯はやちねという、北の方附馬牛つくもうしの奥にあり。東の方には六角牛山ろっこうし立てり。石神いしがみという山は附馬牛と達曾部たつそべとの

間にありて、その高さ前の二つよりも劣れり。^{おと}大昔に女神あり、
 三人の娘を伴ないて^{とも}この高原に來たり、今の來^{らい}内村^{ない}の伊豆權現^{いずこんげん}
 の社あるところに宿り^{やど}し夜、今夜よき夢を見たらん娘によき山を
 与うべしと母の神の語りて寝たりしに、夜深く天より靈華^{れいかふ}降りて
 姉の姫^{ひめ}の胸の上に止りしを、末の姫眼覚めて窃^{ひそ}にこれを取り、わ
 が胸の上に載せたりしかば、ついに最も美しき早池峯の山を得、
 姉たちは六角牛と石神とを得たり。若き三人の女神おのおの三の
 山に住し今もこれを領したもう故^{ゆえ}に、遠野の女どもはその妬^{ねたみ}を畏
 れて今もこの山には遊ばずといえり。

○この一里は小道すなわち坂東道^{ばんとうみち}なり、一里が五丁または六
 丁なり。

○タツソベもアイヌ語なるべし。岩手郡玉山村にも同じ大字
あり。おおあぎ

○上郷村大字来内、ライナイもアイヌ語にてライは死のことナ
イは沢なり、水の静かなるよりの名か。

三 山々の奥には山人住めり。栃とちない内村わの和野の佐々木嘉兵衛とい

う人は今も七十余にて生存せり。この翁おきな若かりしころ獵をして山

奥に入りしに、遥はるかなる岩の上に美しき女一人ありて、長き黒髪

を梳くしけずりていたり。顔の色きわめて白し。不敵の男なれば直ただちに銃を

差し向けて打ち放せしに弾たまに應じて倒れたり。そこに馳かけつけて

見れば、身のたけ高き女にて、解きたる黒髪はまたそのたけより

も長かりき。のちの驗しるしにせばやと思ひてその髪をいささか切り取

り、これを縮わがねて懐ふところに入れ、やがて家路に向いしに、道の程にて耐たえがたく睡眠もよおを催しければ、しばらく物蔭ものかげに立寄りてまどろみたり。その間夢ゆめと現うつとの境のようなる時に、これも丈たけの高き男一人近よりて懷中に手を差し入れ、かの縮ねたる黒髪を取り返し立ち去ると見ればたちまち睡ねむりは覺めたり。山男なるべしといえり。

○土淵村大字栃内。

四 山口村の吉兵衛という家の主人、根子立ねっこだちという山に入り、笹ささを茹かりて束たばとなし担かつぎて立上らんとする時、笹原の上を風の吹き渡るに心づきて見れば、奥の方なる林の中より若き女の穉おさなご児おを負おいたるが笹原の上を歩みて此方へ来るなり。きわめてあでやかなる女にて、これも長き黒髪を垂れたり。児こを結ゆいつけたる紐ひも

は藤の蔓つるにて、着きたる衣類は世の常の縞物しまものなれど、裾すそのあたり
ぼろぼろに破れたるを、いろいろの木の葉などを添えて綴つづりたり。
足は地に着つくとも覺えず。事もなげに此方に近より、男のすぐ前
を通して何いづかた方へか行き過ぎたり。この人はその折の怖おそろしさよ
を煩わずらはじい始めて、久しく病やみてありしが、近きころ亡うせたり。

○土淵村大字山口、吉兵衛は代々の通称なればこの主人もまた
吉兵衛ならん。

五 遠野郷より海岸の田たノ浜はま、吉利吉里などへ越ゆるには、昔よ
り笛吹峠ふえふきとうげという山路やまみちあり。山口村より六角牛ろっこうしの方へ入り
路のりも近かりしかど、近年この峠を越ゆる者、山中にて必ず山
男山女に出逢であうより、誰もみな怖おそろしがりて次第に往来も稀まれにな

りしかば、ついに別の路を境木峠さかいげとうげという方に開き、和山わやまを馬う次場まつぎばとして今は此方ばかりを越ゆるようになれり。二里以上の迂路うろなり。

○山口は六角牛に登る山口なれば村の名となれるなり。

六 遠野郷にては豪農のことを今でも長者という。青笹村大字糠ぬかのまえ

前の長者の娘、ふと物に取り隠されて年久しくなりしに、同

じ村の何某という獵師りようし、或る日山に入りて一人の女に遭うあ。怖

ろしくなりてこれを撃たんとせしに、何おじではないか、ぶつな

という。驚きてよく見れば彼の長者がまな娘なり。何故なにゆえにこん

な処ところにはおるぞと問えば、或る物に取られて今はその妻となれり。

子もあまた生うみたれど、すべて夫おととが食つくい尽して一人此のごとくあ

り。おのれはこの地に一生を送ることなるべし。人にも言うな。御身も危うければ疾く帰れというままだ、その在所をも問い明らめずして遁げ還れりという。

○糠の前は糠の森の前にある村なり、糠の森は諸国の糠塚と同じ。遠野郷にも糠森・糠塚多くあり。

七 上郷村の民家の娘、栗を拾いに山に入りたるまま帰り来たらず。家の者は死したるならんと思ひ、女のしたる枕を形代として葬式を執行い、さて二三年を過ぎたり。しかるにその村の者獵をして五葉山の腰のあたりに入りしに、大なる岩の蔽いかりて岩窟のようになれるところにて、図らずこの女に逢いたり。互いに打ち驚き、いかにしてかかる山にはおるかと思えば、女の

曰く、山に入りて恐ろしき人にさらわれ、こんなところに来たるなり。遁にげて帰らんと見えど些いささかの隙すきもなしとのことなり。その人はいかなる人かと問うに、自分には並なみの人間と見ゆれど、ただ丈たけきわめて高く眼の色少し凄すこしと思わる。子供も幾人か生みたれど、我に似ざれば我子にはあらずといいて食くらうにや殺すにや、みないずれへか持ち去りてしまふなりという。まことに我々と同じ人間かと押し返して問えば、衣類なども世の常なれど、ただ眼の色少しちがえり。一市間ひといちあいに一度か二度、同じようなる人四五人集まりきて、何事か話をなし、やがて何方どちらへか出て行くなり。食物など外より持ち来たるを見れば町へも出ることもならん。かく言ううちにも今にそこへ帰つて来るかも知れずという故、獵師も怖ろし

くなりて歸りたりといえり。二十年ばかりも以前のことかと思わ
る。

○一市間は遠野の町の市の日と次の市の日の間なり。月六度の
市なれば一市間はすなわち五日のことなり。

八 たそがれ 黄昏に女や子供の家の外に出ている者はよく神かみかく隠しにあう

ことは他の国々と同じ。よそ松崎村の寒戸さむとというところの民家にて、

若き娘なし梨の樹きの下に草履ぞうりを脱ぬぎ置きたるまま行方ゆくえを知らずなり、

三十年あまり過ぎたりしに、或る日親類知音の人々その家に集あつま

りてありしところへ、きわめて老いさらばいてその女歸り来たれ
り。いかにして歸つて来たかと問えば人々に逢いたかりし故歸り
しなり。さらばまた行かんとて、再び跡あとを留とどめず行き失うせたり。

その日は風の烈しく吹く日なりき。されば遠野郷の人は、今でも風の騒がしき日には、きようはサムトの婆が帰つて来そうな日なりという。

九 菊池弥之助やのすけという老人は若きころ駄賃だちんを業とせり。笛の名人にて夜通しよどおに馬を追いて行く時などは、よく笛を吹きながら行きたり。ある薄月夜うすづきよに、あまたの仲間の者とともに浜へ越ゆる境木峠を行くとて、また笛を取り出して吹きすさみつつ、大谷地おおやちというところの上を過ぎたり。大谷地は深き谷にて白樺しらかんばの林しげく、その下は葦あしなど生じ湿りしめたる沢なり。この時谷の底より何者か高き声にて面白いぞーと呼よばわる者あり。一同ことごとく色を失い遁げ走りたりといえり。

○ヤチはアイヌ語にて湿地の義なり、内地に多くある地名なり。

またヤツともヤトともヤともいう。

一〇 この男ある奥山に入り、茸きのこを採るとて小屋を掛けか宿りとまてあ

りしに、深夜に遠きところにてきやーという女の叫び声聞え胸を轟とどろかしたることあり。里へ歸りて見れば、その同じ夜、時も同じ

刻限に、自分の妹なる女その息子むすこのために殺されてありき。

一一 この女というは母一人子一人の家なりしに、嫁よめと姑しゅうととの仲

悪あしくなり、嫁はしばしば親里へ行きて歸り来ざることあり。そ

の日は嫁は家において打ち臥ふしておりしに、昼のころになり突然

と倅せがれのいうには、ガガはとても生いかしては置かれぬ、今日きょうはきつ

と殺すべしとて、大なる草苳くさかり鎌がまを取り出し、ごしごしと磨とぎ始

めたり。そのありさまさらにたわむれごと戯言とも見えざれば、母はさま
 ざまに事を分けて詫わびたれども少しも聴かず。嫁も起き出いでて泣
 きながら諫いさめたれど、露つゆ従したがう色もなく、やがて母が遁のがれ出でんと
 する様子ようすあるを見て、前後の戸口をことごとく鎖とぎしたり。使用に
 行きたしといえ、おのれみずから外より便器を持ち来たりてこ
 れへせよという。夕方にもなりしかば母もついにあきらめて、大
 なる囲炉裡いろりかたわらの側にうずくまりただ泣きていたり。倅せがれはよくよく磨と
 ぎたる大鎌を手にして近より来たり、まず左の肩口を目がけて薙な
 ぐようにすれば、鎌の刃先はさきろ炉ろの上うえの火棚ひだなに引ひつかかりてよく斬きれ
 ず。その時に母は深山の奥にて弥之助が聞きつけしようなる叫きび
 声を立てたり。二度目には右の肩より切り下さげたるが、これにて

もなお死絶しにたえずしてあるところへ、里人さとびとら驚きて馳はせつけ倅こを取り抑おさえ直に警察官を呼よびて渡わたしたり。警官がまだ棒を持ちてある時代のことなり。母親は男が捕とらえられ引き立てられて行くを見て、滝のように血の流るる中より、おのれは恨うらみも抱いだかずに死ぬるなれば、孫四郎は宥ゆるしたまわれという。これを聞きて心を動うごかさぬ者はなかりき。孫四郎は途中にてもその鎌を振り上げて巡査を追い廻しなどせしが、狂人なりとて放免せられて家に帰り、今も生きて里にあり。

○ガガは方言にて母ということなり。

一二 土淵村山口に新田にったおとぞう乙蔵という老人あり。村の人は乙おとじい爺やという。今は九十に近く病やみてまさに死しなんとす。年としごろ頃遠野郷

の昔の話をよく知りて、誰かに話して聞かせ置きたしと口癖くちぐせの
 ようにいえど、あまり臭くさければ立ち寄りて聞かんとする人なし。
 ところどころ
 処々たてぬしの館の主の伝記、家々いはいえの盛衰、昔よりこの郷ごうに行われ
 し歌の数々を始めとして、深山の伝説またはその奥に住める人々
 の物語など、この老人最もよく知れり。

○惜おしむべし、乙爺は明治四十二年の夏の始めになくなりたり。

一三 この老人は数十年の間山の中に独ひとりにて住みし人なり。よ
 き家柄いえがらなれど、若きころ財産を傾け失いてより、世の中に思
 を絶たち、峠の上に小屋こやを掛け、甘酒あまざけを往來おうらいの人に売うりて活計
 とす。駄賃だちんの徒とはこの翁ちちおやを父親ちちおやのように思おもいて、親したしみたり。
 少しく収入あまの余あれば、町くだに下りきて酒を飲む。赤毛布あかゲットにて作

りたる半纏はんてんを着て、赤き頭巾あざきんを被りかぶ、酔えば、町の中を躍りおどて
帰るに巡查もとがめず。いよいよ老衰して後、旧里きゆうりに帰りあわ
れなる暮しくらをなせり。子供はすべて北海道へ行き、翁ただ一人な
り。

一四 部落ぶらくには必ず一戸の旧家ありて、オクナイサマという神を
祀まつる。その家をば大だい同どうという。この神の像ぞうは桑くわの木を削りけずて顔かお
を描きえが、四角なる布ぬのの真中まんなかに穴あを明け、これを上うへより通とおして衣い
裳しょうとす。正月の十五日には小字中こあざじゆうの人々この家に集まり来きた
りてこれを祭る。またオシラサマという神あり。この神の像もま
た同じようにして造り設けもう、これも正月の十五日に里人さとびと集まり
てこれを祭る。その式には白粉おしろいを神像の顔に塗ることあり。大

同の家には必ずたみいちじょう畳一帖しつの室あり。この部屋へやにて夜寝よるねる者はいつも不思議に遭あう。枕まくらを反かえすなどは常のとなり。或いは誰かに抱だき起おこされ、または室より突つき出いださるることもあり。およそ静かに眠ることを許さぬなり。

○オシラサマは双神なり。アイヌの中にもこの神あること『蝦夷風俗彙聞いふん』に見ゆ。

○羽後苅和野の町にて市の神の神体なる陰陽の神に正月十五日白粉を塗りて祭ることあり。これと似たる例なり。

一五 オクナイサマを祭れば幸多さいわいし。土淵村大字柏かしわざき崎の長者阿部氏、村にては田圃たんぼの家うちという。この家にて或る年田植たうえの人手ひと足らず、明日は空も怪あすしきそらに、わずかばかりの田を植え残すこと

かなどつぶやきてありしに、ふと何方いずちよりともなく丈低たひくき小僧こぞう一人来たりて、おのれも手伝い申さんというに任まかせて働はたらかせて置きしに、午飯ひるめしどき時に飯めしを食たわせんとて尋たずねたれど見えぬ。やがて再び歸りきて終日、代しろを搔かきよく働はたらきてくれしかば、その日に植うゑはてたり。どこの人かは知らぬが、晩にはきて物を食くいたまゑと誘さそいしが、日暮れてまたその影かげ見えぬ。家に歸りて見れば、縁えん側わに小こさき泥どろの足跡あしあとあまたありて、だんだんに座敷に入り、オクナイサマの神棚かみだなのところとどまに止りてありしかば、さてはと思おもいてその扉とびらを開き見れば、神像の腰より下は田どろの泥にまみれていませし由よし。

一六 コンセサマを祭れる家も少なからず。この神の神体はオコ

マサマとよく似たり。オコマサマの社は里に多くあり。石または木にて男の物を作りて捧ぐるなり。今はおいおいとその事少なくなれり。

一七 旧家きゆうかにはザシキワラシという神の住みたもう家少なから

ず。この神は多くは十二三ばかりの童児なり。おりおり人に姿を見することあり。土淵村大字飯豊いいでの今淵いまぶち勘十郎という人の家に

ては、近きころ高等女学校にいる娘の休暇にて帰りてありしが、

或る日廊下ろうかにてはたとザシキワラシに行き逢あい大いに驚きしこと

あり。これは正しく男の児こなりき。同じ村山口なる佐々木氏にて

は、母人ひとり縫物ぬいものしておりしに、次の間にて紙のがさがさと

いう音あり。この室は家の主人の部屋へやにて、その時は東京に行き

不在の折なれば、怪しと思ひて板戸を開き見るに何の影もなし。
しばらくの間あいだわ坐りて居ればやがてまた頻しきりに鼻を鳴ならす音あり。さ
ては座敷ざしきワラシなりけりと思へり。この家にも座敷ワラシ住めり
ということ、久しき以前よりの沙汰さたなりき。この神の宿やどりたもう
家は富貴自在なりということなり。

○ザシキワラシは座敷童衆なり。この神のこと『石いしがみ神問答』
中にも記事あり。

一八 ザシキワラシまた女の児なることあり。同じ山口なる旧家
にて山口孫左衛門という家には、童女の神二人いませりというこ
とを久しく言い伝えたりしが、或る年同じ村の何某という男、町
より帰るとて留場とめばの橋のほとりにて見馴みなれざる二人のよき娘に逢

えり。物思わしき様子にて此方へ来たる。お前たちはどこから来たと問えば、おら山口の孫左衛門がところからきたと答う。これから何処へ行くのかと聞けば、その村の何某が家にと答う。その何某はやや離れたる村にて、今も立派に暮せる豪農なり。さては孫左衛門が世も末だなどと思いが、それより久しからずして、この家の主従二十幾人、茸きのこの毒あたに中りて一日のうちに死に絶え、七歳の女の子一人を残せしが、その女もまた年老いて子なく、近きころ病やみて失せたり。

一九 孫左衛門が家にては、或る日梨なしの木みなのめぐりに見馴きのこれぬ茸のあまた生はえたるを、食わんか食うまじきかと男どもの評議してあるを聞きて、最後の代の孫左衛門、食わぬがよしと制したれど

も、下男の一人がいうには、いかなる茸にても水桶みずおけの中に入れて、おがら芋殻をもつてよくかき廻まわしてのち食えば決して中あたることなしとて、一同この言に従い家内ことごとくこれを食いたり。七歳の女の児こはその日外に出でて遊びに氣を取られ、昼飯を食いに帰ることを忘れたために助かりたり。不意の主人の死去にて人々の動転してある間に、遠き近き親類の人々、或いは生前に貸かしありといい、或いは約束ありと称して、家の貨財は味噌みその類たぐいまでも取り去りしかば、この村草くさわけ分の長者なりしかども、一朝にして跡方あとかたもなくなりたり。

二〇 この兇變の前にはいろいろの前兆ありき。男ども苅置かりおきたまぐさの秣まぐさを出すとして三ツ齒くわの鋤かにて掻きまわせしに、大なる蛇へびを見出みいだ

したり。これも殺すなど主人が制せしをも聴かずして打ち殺したりしに、その跡より秣の下にいくらともなき蛇ありて、うごめき出でたるを、男ども面白半分にことごとくこれを殺したり。さて取り捨つべきところもなければ、屋敷の外そとに穴を掘りてこれを埋うめ、蛇塚を作る。その蛇は簀あじかに何荷なんがともなくありたりといえり。

二 右の孫左衛門は村には珍しき学者にて、常に京都より和漢の書を取り寄せて読み耽ふけりたり。少し変人という方なりき。狐きつねと親ほしくなりて家を富ます術を得んと思ひ立ち、まず庭の中に稲荷いなりの祠ほこらを建て、自身京に上りて正一位の神階を請うけて帰り、それよりは日々一枚の油揚あぶら揚げを欠かすことなく、手ずから社頭に供そなえて拝をなせしに、のちには狐馴なれて近づけども遁にげず。手を延ばし

てその首を抑え^{おさ}などしたりという。村にありし薬師の堂^{どう}守^{もり}は、わが仏様は何ものをも供^{そな}えざれども、孫左衛門の神様よりは御利^{ごり}益^{やく}ありと、たびたび笑いごとにしたりとなり。

二二 佐々木氏の曾祖母^{そうそぼ}年よりて死去せし時、棺^{かん}に取り納め親族の者集まりきてその夜は一同座敷にて寝たり。死者の娘にて乱心のため離縁せられたる婦人もまたその中にありき。喪^もの間は火の気を絶^たやすことを忌^いむがところの風^{ふう}なれば、祖母と母との二人のみは、大なる囲炉^{いろり}裡^りの両^{りょう}側^{がわ}に坐^{すわ}り、母^{はは}人は旁^{はたわら}に炭籠^{すみかご}を置き、おりおり炭を継^つぎてありしに、ふと裏口の方より足音してくる者あるを見れば、亡^なくなりし老女なり。平生^{へいぜい}腰かがみて衣物^{きもの}の裾^{すそ}の引きずるを、三角に取り上げて前に縫いつけてありしが、

まざまざとその通りにて、縞目しまめにも見覚えみおぼあり。あなやと思う間もなく、二人の女の坐れる炉の脇を通り行くとして、裾すもとりにて炭取にさわりしに、丸き炭取なればくるくるとまわりたり。母人は氣きじよう丈の人なれば振り返りあとを見送りたいれば、親縁の人々の打ち臥ふしたる座敷の方へ近より行くと思うほどに、かの狂女のけたたましき声にて、おばあさんが来たと叫びたり。その余の人々はこの声ねむりさまに睡を覚しただ打ち驚くばかりなりしといえり。

○マーテルリンクの『侵入者』を想い起こさしむ。

二三 同じ人の二七日の速夜たいやに、知音の者集まりて、夜更ふくるまで念仏となを唱え立ち帰らんとする時、門かどぐち口の石に腰掛けてあちらを向ける老女あり。そのうしろ付つき正しく亡なくなりし人の通りなり

き。これは数多あまたの人見たる故ゆゑに誰も疑わず。いかなる執しゅう着うじやくのありしにや、ついに知る人はなかりしなり。

二四 村々の旧家を大同だいてうというは、大同元年に甲斐かいのくに国より移り来たる家なればかくいうとのことなり。大同は田村將軍征討の時代なり。甲斐は南部家の本国なり。二つの伝説を混じたるに非あらざるか。

○大同は大洞かも知れず、洞とは東北にて家門または族ということなり。『常陸ひたちのこく国志』に例あり、ホラマエという語のちに見ゆ。

二五 大同の祖先たちが、始めてこの地方に到着せしは、あたかも歳としの暮くれにて、春のいそぎの門松かどまつを、まだ片方かたほうはえ立てぬう

ちに早元日はやになりたればとて、今もこの家々にては吉例として門松の片方を地に伏せたるままにて、標縄しめなわを引き渡すとのことなり。

二六 柏崎の田圃たんぼのうちと称する阿倍氏はことに聞えたる旧家なり。この家の先代に彫刻たくみに巧なる人ありて、遠野一郷の神仏の像にはこの人の作りたる者多し。

二七 早池峯はやちねより出でて東北の方宮古みやこの海に流れ入る川を閑伊川へいがわという。その流域はすなわち下閑伊郡なり。遠野の町の中にて今は池の端いはたという家の先代の主人、宮古に行きての帰るさ、この川はらだいの原台ふちの淵ふちというあたりを通りしに、若き女ありて一封の手紙を托たくす。遠野の町の後なる物見山の中腹にある沼に行きて、手を

叩^{たた}けば宛^{あて}名の^な人^{ひと}いで来^くべしとなり。この人^う請^うけ合^あいはしたれども
路^{みち}々^{みち}心^{こころ}に掛^かりてとつおいつせしに、一人^{ひとり}の六^{ろく}部^ぶに行^いき逢^あえり。
この手紙^{てし}を開^{ひら}きよみて曰^{いわ}く、これを持^もち行^いかば汝^{なんじ}の身^みに大^{おほ}なる災^{わざわい}
あるべし。書^かき換^かえて取^とらすべしとて更^{さら}に別^{べつ}の手紙^{てし}を与^よえたり。
これを持^もちて沼^{ぬま}に行^いき教^しえのごとく手^てを叩^{たた}きしに、果^はして若^わき女^を
いでて手紙^{てし}を受^うけ取^とり、その礼^{れい}なりとてきわめて小^こさき石^{いし}臼^{うす}を
くれたり。米^{こめ}を一^{ひと}粒^{つぶ}入^いれて回^{まわ}せば下^{した}より黄^{おう}金^{ごん}出^いづ。この宝^{たから}物^{もの}
の力^{ちから}にてその家^{いへ}やや富^と有^うになりしに、妻^{つま}なる者^{もの}慾^{よく}深^{ふか}くして、一^{ひと}度^ど
にた^たくさん^{さん}の米^{こめ}をつかみ入^いれしかば、石^{いし}臼^{うす}はしきりに自^{みづか}ら回^{まわ}りて、
つ^ついには朝^あごと^とに主^{しゅ}人^{にん}がこ^この石^{いし}臼^{うす}に供^くえたりし水^{みづ}の、小^こさき窪^{くぼ}み
の中^なに溜^{たま}りてありし中^なへ滑^{すべ}り入^いりて見^みえずなりたり。その水^{みづ}溜^{たま}り

はのちに小さき池になりて、今も家の旁かたわらにあり。家の名を池の端
 というもその為ためなりという。

○この話に似たる物語西洋にもあり、偶合にや。

二八 始めて早池峯に山路やまみちをつけたるは、附馬牛村の何某とい
 う獵師にて、時は遠野の南部家入部にゅうぶの後のことなり。その頃ま
 では土地の者一人としてこの山には入りたる者なかりしと。この
 獵師半分ばかり道を開きて、山の半腹に仮小屋かりごやを作りておりしこ
 ろ、或る日あ炉ろの上に餅もちをならべ焼きながら食いおりしに、小屋の
 外を通る者ありて頻しきりに中を窺うかがうさまなり。よく見れば大なる坊主
 なり。やがて小屋の中に入り来たり、さも珍しげに餅の焼くるを
 見てありしが、ついにこらえ兼ねて手かをさし延べて取りて食う。

狛師も恐ろしければ自らもまた取りて与えしに、嬉しげになお食
いたり。餅皆みなになりたれば帰りぬ。次の日もまた来るならんと思
い、餅によく似たる白き石を二つ三つ、餅にまじえて炉の上に載
せ置きしに、焼けて火のようになれり。案のごとくその坊主きよ
うもきて、餅を取りて食うこと昨日のごとし。餅尽つきてのちその
白石をも同じように口に入れたりしが、大いに驚きて小屋を飛び
出し姿見えなれり。のちに谷底にてこの坊主の死してあるを見
たりといえり。

○北上川の中古の大洪水に白髪水というがあり、白髪うばあざむの姥うばあざむを欺たたりき餅に似たる焼石を食わせし崇たたりなりという。この話によく似
たり。

二九 鷄頭山けいとうざんは早池峯の前面に立てる峻峯しゅんぽうなり。麓ふもとの里
 てはまた前薬師まえやくしともいう。天狗住めりとて、早池峯に登る者も
 決してこの山は掛かけず。山口のハネトという家の主人、佐々木氏
 の祖父と竹馬の友なり。きわめて無法者にて、鉞まさかりにて草を薙かり鎌かま
 にて土を掘るなど、若き時は乱暴の振舞ふるまいのみ多かりし人なり。
 或る時人と賭かけをして一人にて前薬師に登りたり。帰りての物語に
 曰く、頂上に大なる岩あり、その岩の上に大男三人いたり。前に
 あまたの金銀をひろげたり。この男の近よるを見て、気色けしきばみて
 振り返る、その眼の光きわめて恐ろし。早池峯に登りたるが途みちに
 迷いて来たるなりと言え、然しからば送りて遣やるべしとて先に立たち、
 麓ふもと近ふもときところまで来たり、眼を塞ふさげと言うままに、暫時そこに立

ちている間に、たちまち異人は見えなくなりたりという。

三〇 小国村おぐにの何某という男、或る日早池峯に竹を伐きりに行きしに、地竹じだけのおびただしく茂りたる中に、大なる男一人寝ていたるを見たり。地竹にて編みたる三尺ばかりの草履ぞうりを脱ぬぎてあり。仰あおに臥ふして大なる躰いびきをかきてありき。

○下閉伊郡小国村大字小国。

○地竹は深山に生ずる低き竹なり。

三一 遠野郷の民家の子女にして、異人にさらわれて行く者年々多くあり。ことに女に多しとなり。

三二 千晩せんばヶ岳だけは山中に沼ぬまあり。この谷は物すごく腥なまぐさき臭かのするところにて、この山に入り帰りたる者はまことに少すくなし。昔何の

隼人^{はやと}という獵師あり。その子孫今もあり。白き鹿を見てこれを追

いこの谷に千晩こもりたれば山の名とす。その白鹿撃たれて遁げ、

次の山まで行きて片^{かたあし}肢折れたり。その山を今片^{かたはやま}羽山という。

さてまた前なる山へきてついに死したり。その地を死助^{しすけ}という。

死助^{しすけ}権現^{ごんげん}とて祀^{まつ}れるはこの白鹿なりという。

○宛然^{えんぜん}として古風土記をよむがごとし。

三三 白望^{しろみ}の山に行きて泊^{とま}れば、深夜にあたり^{うすあか}の薄明^{うすあか}るくなる

ことあり。秋のころ茸^{きのこ}を採^とりに行き山中に宿する者、よくこの事

に逢う。また谷のあなたにて大木を伐^きり倒す音、歌の声など聞^{きこ}ゆ

ることあり。この山の大きさは測^{はか}るべからず。五月に萱^{かや}を苅^かりに行

くとき、遠く望めば桐^{きり}の花の咲き満^みちたる山あり。あたかも紫^{むらさき}の

雲のたなびけるがごとし。されどもついにそのあたりに近づくこと能あたわず。かつて茸を採りに入りし者あり。白望の山奥にて金の樋といと金の杓しゃくとを見たり。持ち帰らんとするにきわめて重く、鎌かまにて片端かたはしを削り取らんとしたれどそれもかなわず。また来こんと思いて樹の皮を白くし栞しおりとしたりしが、次の日人々とともに行きてこれを求めたれど、ついにその木のありかをも見出しえずしてやみたり。

三四 白望の山続はなれもりきに離森はなれもりというところあり。その小字こあざに長者屋敷というは、全く無人の境なり。ここに行きて炭を焼く者ありき。或る夜その小屋の垂たれごも菰ももをかかげて、内うかがを窺う者を見たり。髪を長く二つに分けて垂たれたる女なり。このあたりにても深夜に

女の叫び声を聞くことは珍しからず。

三五 佐々木氏の祖父の弟、白望に茸を採りに行きて宿りし夜、谷を隔てたるあなたの大なる森林の前を横ぎりて、女の走り行くを見たり。中空を走るように思われたり。待てちやアと二声ばかり呼ばわりたるを聞けりとぞ。

三六 猿の経立、御犬の経立は恐ろしきものなり。御犬とは狼のことなり。山口の村に近き二ツ石山は岩山なり。ある雨の日、小学校より帰る子どもこの山を見るに、処々ところどころの岩の上に御犬うずくまりてあり。やがて首を下より押しあぐるようにしてかわるがわる吠えたり。正面より見れば生まれ立ての馬の子ほどに見ゆ。後から見れば存外小さしといえり。御犬のうなる声ほど物

のすこ
凄く恐ろしきものはなし。

三七 境木峠さかいげとうげと和山峠わやまとうげとの間にて、昔は駄賃馬だちんばを追う者、

しばしば狼に逢いたりき。馬方うまかたらは夜行には、たいてい十人ば

かりも群むれをなし、その一人が牽く馬は一端綱ひとはづなとてたいてい五六

七匹びきまでなれば、常に四五十匹の馬の数なり。ある時二三百ばか

りの狼追い来たり、その足音山もどよむばかりなれば、あまりの

恐ろしさに馬も人も一所に集まりて、そのめぐりに火を焼きてこ

れを防ぎたり。されどなおその火を躍り越えて入り来るにより、

ついには馬の綱つなを解きとこれを張り回はらせしに、穿おとしなどなりと思

いけん、それよりのちは中に飛び入らず。遠くより取りと囲かこみて夜

の明あけるまで吠えてありきとぞ。

三八 小友村^{おとも}の旧家の主人にて今も生存せる某^{なにがし}爺^{じい}という人、町より歸りに頻^{しきり}に御犬^ほの吠ゆるを聞きて、酒に酔いたればおのれもまたその声をまねたりしに、狼も吠えながら跡^{あと}より来るようなり。恐ろしくなりて急ぎ家に歸り入り、門の戸を堅^{かた}く鎖^{とぎ}して打ち^うひそ潜^{ひそ}みたれども、夜通し狼の家をめぐりて吠ゆる声やまず。夜明^{よあ}けて見れば、馬屋の土台^{どだい}の下を掘^{うが}り穿ちて中に入り、馬の七頭ありしをことごとく食い殺していたり。この家はそのころより産やや傾きたりとのことなり。

三九 佐々木君幼きころ、祖父と二人にて山より歸りしに、村に近き谷川の岸の上に、大なる鹿の倒れてあるを見たり。横腹は破れ、殺されて間^まもなきにや、そこよりはまだ湯氣^{ゆげ}立てり。祖父の

曰く、これは狼が食いたるなり。この皮ほしけれども御犬は必ずどこかこの近所に隠れて見ておるに相違なければ、取ることができぬといえり。

四〇 草の長さ三寸あれば狼は身を隠すといえり。草木そうもくの色の移り行くにつれて、狼の毛の色も季節きせつごとに変りて行くものなり。四一 和野の佐々木嘉兵衛、或る年境さかいげごえ木越おおやちの大谷地へ狩にゆきたり。死助しすけの方より走れる原なり。秋の暮のことにて木の葉は散り尽し山もあらわなり。向うの峯むこより何百とも知れぬ狼此方へ群むれて走りくるを見て恐ろしさに堪えず、樹の梢こずえに上りてありしに、その樹の下を夥おびただしき足音して走り過ぎ北の方へ行けり。そのころより遠野郷には狼甚だ少なくなれりとのことなり。

四二 ろっこうし 六角牛山の麓ふもとにオバヤ、板小屋などいうところあり。広
 き萱かやま山なり。村々よりか苅りに行く。ある年の秋飯いいでむら豊村の者ど
 も萱を苅るとて、岩穴の中より狼の子三匹を見出し、その二つを
 殺し一つを持ち帰りしに、その日より狼の飯いいでし豊衆の馬を襲おそうこと
 やまず。外ほかの村々の人馬にはいささかも害をなさず。飯豊衆相談
 して狼狩をなす。その中には相撲すもうを取り平生へいぜい ちからじまん力自慢の者あり。
 さて野に出いでて見るに、雄おすの狼は遠くにおりて来きたらず。雌めす狼一
 つ鉄という男に飛びかかりたるを、ワツポロを脱うぎて腕うでに巻き、
 やにわにその狼の口の中に突き込みしに、狼これを噛かむ。なお強
 く突き入れながら人を喚よぶに、誰も誰も怖おそれて近よらず。その間
 に鉄の腕は狼の腹まで入はいり、狼は苦しまぎれに鉄の腕骨を噛かみ砕くだ

きたり。狼はその場にて死したれども、鉄も担^{かつ}がれて帰り程^{ほど}なく死したり。

○ワツポロは上羽織のことなり。

四三 一 昨年の『遠野新聞』にもこの記事を載せたり。上^{かみごう}郷村の熊という男、友人とともに雪の日に六角牛に狩に行き谷深く入りしに、熊の足跡を見出でたれば、手分^{てわけ}してその跡を^{もと}め、自分は峯の方^{ごう}を行きしに、とある岩の陰^{かげ}より大なる熊此方を見る。矢^や頃^{ごろ}あまりに近かりしかば、銃をすてて熊に抱^{かか}えつき雪の上を転^{ころ}びて、谷へ下る。連^{つれ}の男これを救わんと思えども力及ばず。やがて谷川に落ち入りて、人の熊下^{した}になり水に沈^{しづ}みたりしかば、その隙^{ひま}に獣の熊を打ち取りぬ。水にも溺^{おぼ}れず、爪^{つめ}の傷は数ヶ所受けたれ

ども命に障さわることはなかりき。

四四 六角牛の峯続きにて、橋野はしのという村の上なる山に金坑きんこうあり。

り。この鉱山のために炭を焼きて生計とする者、これも笛じようの上ずにて、ある日昼の間小屋ひるあいだこやにあり、仰向あおもむきに寝転びて笛を吹き

てありしに、小屋の口なる垂菰たれごもをかかぐる者あり。驚きて見れ

ば猿の経ふつたち立なり。恐ろしくて起き直りたれば、おもむろに彼方かなた

へ走り行きぬ。

○上閉伊郡栗橋村大字橋野。

四五 猿の経ふつたち立はよく人に似て、女色を好み里の婦人を盗み去

ること多し。松脂まつやにを毛ぬに塗り砂をその上につけておる故、毛皮けがわ

は鎧よろいのごとく鉄砲の弾たまも通とおらず。

四六 栃内村の林^{はやしぎき}崎に住む何某という男、今は五十に近し。

十年あまり前のことなり。六角牛山に鹿を撃ちに行き、オキを吹きたりしに、猿の経立あり、これを真^{まこと}の鹿なりと思ひしか、地竹^{じだけ}を手にて分け^わながら、大なる口をあけ嶺^{かみ}の方より下^{くだ}り来たれり。胆^{きもつぶ}潰れて笛を吹きやめたれば、やがて反^それて谷の方へ走り行きたり。

○オキとは鹿笛のことなり。

四七 この地方にて子供をおどす言葉^{ことば}に、六角牛の猿の経立が来るぞということ常の事なり。この山には猿多し。緒持^{おがせ}の滝^{たき}を見に行けば、崖^{がけ}の樹^{こずえ}の梢^{こずえ}にあまたおり、人を見れば遁^にげながら木の実^みなどを擲^{なげう}ちて行くなり。

四八 仙人峠せんにとうげにもあまた猿おりて行人に戯たわむれ石を打ちつけな

どす。

四九 仙人峠は登り十五里くだ降り十五里あり。その中ほどに仙人の像を祀りたる堂あり。この堂の壁かべには旅人がこの山中にて遭いたる不思議の出来事を書き識しるすこと昔よりの習ならいなり。例えば、我は越後の者なるが、何月何日の夜、この山路やまみちにて若き女の髪を垂たれたるに逢えり。こちらを見てにこと笑いたりという類たぐいなり。またこの所にて猿に悪戯いたずらをせられたりとか、三人の盜賊に逢えりというようなる事をも記しるせり。

○この一里も小道なり。

五〇 死助しすけの山にカツコ花あり。遠野郷にても珍しという花なり。

五月閑古鳥かんこどりの啼なくころ、女や子どもこれを採とりに山へ行く。酢すの中に漬つけて置けば紫むらさきいろになる。酸漿ほおずきの実みのように吹きて遊ぶなり。この花を採とることは若き者の最も大なる遊樂なり。

五一 山にはさまさまの鳥住すめど、最も寂さびしき声の鳥はオット鳥なり。夏の夜中よなかに啼なく。浜の大槌おおづちより駄賃だちんづけ附の者など峠を越え来たれば、遙はるかに谷底にてその声を聞くといいり。昔ある長者の娘あり。またある長者の男の子と親したしみ、山に行きて遊びしに、男見えずなりたり。夕暮になり夜になるまで探さがしあるきしが、これを見つくることをえずして、ついにこの鳥になりたりという。オットーン、オットーンというは夫おつとのことなり。末の方かすれてあわれなる鳴なきごえ声なり。

五二 馬追鳥うまおいどりは時ほととぎす鳥すこに似て少し大きく、羽の色は赤に茶を

帯おび、肩には馬の綱つなのような縞しまあり。胸のあたりにクツゴコ

(口籠)のようなるかたあり。これも或ある長者が家の奉公人、山

へ馬を放はなしに行き、家に帰らんとするに一匹不足せり。夜通しこ

れを求めあるきしがついにこの鳥となる。アーホー、アーホーと

啼くはこの地方にて野におる馬を追う声なり。年により馬追鳥やと里

にきて啼くことあるは飢饉ききんの前兆なり。深山には常に住みて啼く

声を聞くなり。

○クツゴコは馬の口に嵌はめる網の袋なり。

五三 郭公かつこうと時ほととぎす鳥すことは昔ありし姉あねいもと妹かたなり。郭公は姉な

るがある時芋いもを掘りて焼き、そのまわりの堅きところを自ら食い、

中の軟^{やわら}かなるところを妹に与えたりしを、妹は姉の食^くう分^{ぶん}は一層旨^{うま}かるべしと想^{おも}いて、庖^{ほう}丁^{ちよう}にてその姉を殺^{ころ}せしに、たちまちに鳥となり、ガンコ、ガンコと啼^なきて飛び去^さりぬ。ガンコは方言にて堅^{かた}いところということなり。妹^{いもうと}さてはよきところをのみおのれにくれしなりけりと思^{おも}い、悔恨^{かいこん}に堪^たえず、やがてまたこれも鳥になりて庖^{ほう}丁^{ちよう}かけたと啼^なきたりという。遠^{とほ}野^のにては時鳥^{ときどり}のことを庖^{ほう}丁^{ちよう}かけと呼^よぶ。盛^{もり}岡^{おか}辺^へにては時鳥^{ときどり}はどちやへ飛^とんでたと啼^なくという。

○この芋^{いも}は馬^ば鈴^{れい}薯^{しよ}のことなり。

五四 閉^へ伊^{いが}川^{かわ}の流^{なが}れには淵^{ふち}多く恐^{おそ}ろしき伝^{でん}説^{せつ}少^{せう}なからず。小^こ国^{こく}川^{かわ}との落^お合^がに近^きところに、川^{かわ}井^いという村^{むら}あり。その村^{むら}の長^{ちやう}者^{じや}の奉^{ほう}

公人、ある淵の上なる山にて樹を伐るとて、斧おのを水中に取り落しおとたり。主人の物なれば淵に入りてこれを探りしに、水の底に入るままに物音聞ゆ。これを求めて行くに岩の陰に家あり。奥の方に美しき娘機はたを織りていたり。そのハタシに彼の斧は立てかけてありたり。これを返したまわらんという時、振り返りたる女の顔を見れば、二三年前に身まかりたる我が主人の娘なり。斧は返すべければ我がこの所ところにあることを人にいうな。その礼としてはその方身しんしょう上良くなり、奉公をせずともすむようにして遣やらんといいたり。そのためなるか否かは知らず、その後胴引どうびきなどという博ば奕くちに不思議に勝ち続けて金溜かねたまり、ほどなく奉公をやめ家に引き込みて中ぐらいの農民になりたれど、この男は疾とくに物忘れして、

この娘のいいしことも心づかずしてありしに、或る日同じ淵の辺^{ほとり}を過^すぎて町へ行くとて、ふと前の事を思い出し、伴^{とも}なえる者に以前かかることありきと語りしかば、やがてその噂^{うわさ}は近郷に伝わりぬ。その頃より男は家産再び傾^{かたむ}き、また昔の主人に奉公して年を経たり。家の主人は何と思ひしにや、その淵に何荷^{なんが}ともなく熱湯を注^{そそ}ぎ入れなどしたりしが、何の効もなかりしとのことなり。

○下閉伊郡川井村大字川井、川井はもちろん川合の義なるべし。五五^{わばた}川には川童^{かわっば}多く住めり。猿ヶ石川ことに多し。松崎村の川^か端^{うち}の家にて、二代まで続けて川童の子を孕^{はら}みたる者あり。生れし子は斬^きり刻^{きざ}みて一升樽^{いっしょうだる}に入れ、土中に埋^{うず}めたり。その形^{かたち}きわめて醜怪なるものなりき。女の婿^{むこ}の里は新張村^{にいばり}の何某とて、

これも川端の家なり。その主人人ひとにその始終しじゆうを語れり。かの家の者一同ある日畠はたけに行きて夕方に帰らんとするに、女川の汀みぎぎくまに踞りてにこにこと笑いてあり。次の日は昼ひるの休みにまたこの事あり。かくすること日を重ねたりしに、次第にその女のところへ村の何某という者夜々よるよる通うという噂うわさ立ちたり。始めには婿が浜の方へ駄賃だちんづけ附に行きたる留守るすをのみ窺うかがいたりしが、のちには婿むこと寝たねる夜よるさえくるようになれり。川童なるべしという評判だんだん高くなりたれば、一族の者集まりてこれを守れどもなんの甲斐かいもなく、婿の母も行きて娘の側かたわらに寝たりしに、深夜にその娘の笑う声を聞きて、さては来てありと知りながら身動きもかなわず、人々いかにともすべきようなかりき。その産はきわめて難産なりしが、

或る者のいうには、馬槽うまふねに水をたたえその中にて産まば安く産まるべしとのことにて、これを試みたれば果してその通りなりき。その子は手に水搔みずかきあり。この娘の母もまたかつて川童の子を産みしことありという。二代や三代の因縁にはあらずという者もあり。この家も如法によほうの豪家にて何の某という士族なり。村会議員をしたることもあり。

五六 上郷村の何某の家にてても川童らしき物の子を産うみたることあり。たしか確なる証とてはなけれど、身内真赤みうちまっかにして口大きく、まことにいやな子なりき。忌いまわしければ棄すてんとてこれを携えて道ちがえに持ち行き、そこに置きて一間ばかりも離れたりしが、ふと思ひ直し、惜しきものなり、売りに見せ物にせば金になるべきに

とて立ち歸りたるに、早取り隠されて見えざりきという。

○道ちがえは道の二つに別かるところすなわち追分おいわけなり。

五七 川の岸の砂すなの上には川童の足跡あしあとというものを見ること決

して珍しからず。雨の日の翌日などはことにこの事あり。猿の足

と同じく親指おやゆびは離れて人間の手の跡あとに似たり。長さは三寸に足

らず。指先のあとは人ののように明らかに見えざりという。

五八 小鳥瀬川こがらせがわの姥子淵おばこふちの辺に、新屋しんやの家うちという家いえあり。ある

日淵ふちへ馬を冷ひやしに行き、馬曳うまひきの子は外ほかへ遊びに行きし間に、川

童出でてその馬を引き込まんとし、かえりて馬に引きずられて厩うまや

の前に来たり、馬槽うまふねに覆おおわれてありき。家のもの馬槽の伏せて

あるを怪しみて少しあけて見れば川童の手出でたり。村中のもの

集まりて殺さんか宥さんかと評議せしが、結局^{こんご}今後は村中の馬に
悪^{いたずら}戯をせぬという堅き約束をさせてこれを放したり。その川童
今は村を去りて相^{あいざわ}沢の滝の淵に住めりという。

○この話などは類型全国に充満せり。いやしくも川童のおると
いう国には必ずこの話あり。何の故にか。

五九 外^{ほか}の地にては川童の顔は青しというようなれど、遠野の川
童は面^{つら}の色赭^{いさあか}きなり。佐々木氏の曾^{そうそ}祖母、穉^{おきな}かりしころ友だちと
庭にて遊びてありしに、三本ばかりある胡桃^{くるみ}の木の間より、真^ま赤^{あか}
なる顔したる男の子の顔見えたり。これは川童なりしとなり。今
もその胡桃大木にてあり。この家の屋敷のめぐりはすべて胡桃の
樹なり。

六〇 和野村の嘉兵衛爺、雉子小屋に入りて雉子を待ちしに狐しばしば出でて雉子を追う。あまり憎ければこれを撃たんと思ひ狙いたるに、狐は此方に向きて何ともなげなる顔してあり。さて引金を引きたれども火移らず。胸騒ぎして銃を検せしに、筒口より手元のところまでいつのまにかことごとく土をつめてありたり。

六一 同じ人六角牛に入りて白き鹿に逢えり。白鹿は神なりという言い伝えあれば、もし傷つけて殺すこと能わずば、必ず祟あるべしと思案せしが、名誉の獵人なれば世間の嘲りをいとい、思い切りてこれを撃つに、手応えはあれども鹿少しも動かず。この時もいたく胸騒ぎして、平生魔除けとして危急の時のた

めに用意したる黄金おうごんの丸たまを取り出し、これに蓬よもぎを巻きつけて打ち放したれど、鹿はなお動かず、あまり怪しければ近よりて見るに、よく鹿の形に似たる白き石なりき。数十年の間山中くらに暮せる者が、石と鹿とを見誤みあやまるべくもあらず、全く魔障ましやうの仕業しわざなりけりと、この時ばかりは狛やを止めばやと思いたりきという。

六二 また同じ人、ある夜山よさんちゆう中こやにて小屋を作るいとまなくて、

とある大木の下に寄り、魔除まよけのサンス縄なわをおのれと木のめぐりに三囲みめぐり引きめぐらし、鉄砲を豎たてに抱かかえてまどろみたりしに、夜

深く物音のするに心づけば、大なる僧そうぎよう形おほの者赤き衣ころもを羽はねのよ

うに羽ばたきして、その木の梢に蔽おほいかかりたり。すわやと銃を打ち放せばやがてまた羽ばたきして中なかぞら空を飛びかえりたり。こ

の時の恐ろしさも世の常ならず。前後三たびまでかかる不思議に
 遭い、そのたびごとに鉄砲を止めんと心に誓い、氏神に願掛け
 などすれど、やがて再び思い返して、年取るまで獵人の業を棄
 つること能わずとよく人に語りたり。

六三 小国の三浦某というは村一の金持なり。今より二三代前
 の主人、まだ家は貧しくして、妻は少しく魯鈍なりき。この妻あ
 る日門の前を流るる小さき川に沿いて蒨を採りに入りしに、よき
 物少なければ次第に谷奥深く登りたり。さてふと見れば立派なる
 黒き門の家あり。訝しけれど門の中に入りて見るに、大なる庭に
 て紅白の花一面に咲き鶏多く遊べり。その庭を裏の方へ廻れば、
 牛小屋ありて牛多くおり、馬舎ありて馬多くおれども、一向に人

はおらず。ついに玄関より上りたるに、その次の間には朱と黒との膳ぜんわん碗をあまた取り出したり。奥の座敷には火鉢ひばちありて鉄瓶てつびんの湯のたぎれるを見たり。されどもついに人影はなければ、もしや山男の家ではないかと急に恐ろしくなり、駆け出かして家だに帰たり。この事を人に語れども実まことと思う者もなかりしが、また或る日わが家のカドに出でて物を洗いてありしに、川上より赤き碗一つ流れてきたり。あまり美しければ拾い上げたれど、これを食器に用いたらば汚きたなしと人に叱しかられんかと思ひ、ケセネギツの中に置きてケセネを量はかる器うつわとなしたり。しかるにこの器にて量り始めてより、いつまで経たちてもケセネ尽きず。家の者もこれを怪しみて女に問いたるとき、始めて川より拾い上げし由よしをば語りぬ。この

家はこれより幸運に向い、ついに今の三浦家となれり。遠野にては山中の不思議なる家をマヨイガという。マヨイガに行き当りたる者は、必ずその家の内の什器家畜何にてもあれ持ち出でて来べきものなり。その人に授けんがためにかかる家をば見るなり。女が無慾にて何ものをも盗み来ざりしが故に、この椀自ら流れて来たりしなるべしといえり。

○このカドは門にはあらず。川戸にて門前を流るる川の岸に水を汲み物を洗うため家ごとに設けたるところなり。

○ケセネは米稗その他の穀物をいう。キツはその穀物を容る箱なり。大小種々のキツあり。

六四 金沢村は白望の麓、上閉伊郡の内にててもことに山奥にて、

人の往来する者少なし。六七年前この村より栃内村の山崎なにかしなる某
かが家に娘の婿を取りたり。この婿実家に行かんとして山路に
迷い、またこのマヨイガに行き当りぬ。家のありさま、牛馬雞の
多きこと、花の紅白に咲きたりしことなど、すべて前の話の通り
なり。同じく玄関に入りしに、膳碗を取り出したる室あり。座敷
に鉄瓶てつびんの湯たぎりて、今まさに茶を煮にんとするところのように
見え、どこか便所などのあたりに人が立ちてあるようにも思われ
たり。茫然ぼうぜんとして後にはだんだん恐ろしくなり、引き返してつ
いに小国おぐにの村里に出でたり。小国にてはこの話を聞きて実まこととする
者もなかりしが、山崎の方にてはそはマヨイガなるべし、行きて
膳碗ぜんわんの類を持ち来きたり長者にならんとて、婿殿むこどのを先に立てて人

あまたこれを求めに山の奥に入り、ここに門ありきというところ
 に来たれども、眼にかかるものもなく空しく帰^{むな}り来たりぬ。その
 婿もついに金持になりたりということを聞かず。

○上閉伊郡金沢村。

六五 早池峯^{はやちね}は御影石^{みかげいし}の山なり。この山の小国^むに向きたる側^{かわ}に

安倍ヶ城^{あべがじょう}という岩あり。険^{けわ}しき崖^{がけ}の中ほどにありて、人などはと

ても行きうべきところにあらず。ここには今でも安倍貞任^{あべのさだとう}の母

住めりと言ひ伝う。雨^{あめ}の降^ふるべき夕方など、岩屋^{いわや}の扉^{とびら}を鎖^{とぎ}す音聞

ゆという。小国^{つくもうち}、附馬牛^{ふまうし}の人々は、安倍ヶ城^{じょう}の錠^{じよう}の音がする、

明日^{あす}は雨ならんなどいう。

六六 同じ山の附馬牛よりの登り口にもまた安倍屋敷^{あべやしき}という巖窟

あり。とにかく早池峯は安倍貞任にゆかりある山なり。小国より登る山口にも八幡太郎の家来はちまんとろうの討死うちじにしたるを埋めたりという塚三つばかりあり。

六七 安倍貞任に関する伝説はこのほかにも多し。土淵村と昔は橋野はしのといいし栗橋村との境にて、山口よりは二三里も登りたる山中に、広く平なる原たいらあり。そのあたりの地名に貞任というところあり。沼ありて貞任が馬ひやを冷せしところなりという。貞任が陣屋じんやを構えし址かまとも言い伝う。景色あとよきところにて東海岸よく見ゆ。

六八 土淵村には安倍氏という家ありて貞任が末なりという。昔は栄えたる家なり。今も屋敷やしきの周囲には堀ありて水を通ず。刀剣馬具あまたあり。当主は安倍与右衛門よえもん、今も村にては二三等の物もの

持ち^{のも}にて、村會議員なり。安倍の子孫はこのほかにも多し。盛岡
 の安倍館^{あべだて}の附近にもあり。厨^{くり}川^{やがわ}の柵^{しやく}に近き家なり。土淵村の
 安倍家の四五町北、小烏瀬川^{こがらせがわ}の河隈^{かわくま}に館^{たて}の址あり。八幡沢の
 館^{たて}という。八幡太郎が陣屋というものこれなり。これより遠野の
 町への路^{みち}にはまた八幡山という山ありて、その山の八幡沢の館^{たて}の
 方に向かえる峯にもまた一つの館^{たて}址^{あと}あり。貞任が陣屋なりとい
 う。二つの館の間二十余町を隔つ。矢^や戦^{いくさ}をしたりという言い伝
 えありて、矢の根を多く掘り出せしことあり。この間に似田具^{にたかい}と
 いう部落あり。戦の当時このあたりは蘆^{あし}しげりて土固^{かた}まらず、ユ
 キユキと動揺せり。或る時八幡太郎ここを通りしに、敵味方^{てきみかた}い
 ずれの兵^ひ糧^{よう}にや、粥^{かゆ}を多く置きてあるを見て、これは煮^にた粥

かといいいしより村の名となる。似田貝の村の外を流るる小川を鳴^な川^{るかわ}という。これを隔てて足洗^{あしらがむら}川村あり。鳴川にて義家^{よしいえ}が足を洗^{あら}いしより村の名となるという。

○ニタカイはアイヌ語のニタトすなわち湿地より出しなるべし。地形よく合えり。西の国々にてはニタともヌタともいう皆これなり。下閉伊郡小川村にも二田貝という字あり。

六九 今の土淵村には大同^{だいたいどう}という家二軒あり。山口の大同は当主を大洞^{おおほらまんのじょう}万之丞^{まんしじやう}という。この人の養母名はおひで、八十を超^こえて今も達者なり。佐々木氏の祖母の姉なり。魔法に長じたり。まじないにて蛇を殺し、木に止^{とま}れる鳥を落しなどするを佐々木君はよく見せてもらいたり。昨年^{こぞ}の旧暦正月十五日に、この老女の

語りしには、昔あるところに貧しき百姓あり。妻はなくて美しき娘あり。また一匹の馬を養う。娘この馬を愛して夜よるになれば厩舎うまやに行きて寝いね、ついに馬と夫婦になれり。或る夜父はこの事を知りて、その次の日に娘には知らせず、馬を連つれ出して桑の木につり下げて殺したり。その夜娘は馬のおらぬより父に尋ねてこの事を知り、驚き悲しみて桑の木の下に行き、死したる馬の首に縋すがりて泣きいたりしを、父はこれを悪にくみて斧をもつて後うしろより馬の首を切り落せしに、たちまち娘はその首に乗りたるまま天に昇り去れり。オシラサマというはこの時より成りたる神なり。馬をつり下げたる桑の枝にてその神の像を作る。その像三つありき。本もとにて作りしは山口の大同にあり。これを姉神とす。中にて作りしは山

崎の在家権十郎ざいけごんじゅうろうという人の家にあり。佐々木氏の伯母が縁づきたる家なるが、今は家絶えて神の行方ゆくえを知らず。末すえにて作りし妹神の像は今附馬牛村いまにありといえり。

七〇 同じ人の話に、オクナイサマはオシラサマのある家には必ず伴いないて在います神なり。されどオシラサマはなくてオクナイサマのみある家もあり。また家によりて神の像も同じからず。山口の大同にあるオクナイサマは木像なり。山口の辻はねいし石たにえという人の家なるは掛軸かけじくなり。田圃たんぼのうちにいませるはまた木像なり。飯豊いいでの大同にもオシラサマはなけれどオクナイサマのみはいませりという。

七一 この話をしたる老女は熱心なる念仏者なれど、世の常の念

仏者とは様^{さま}かわり、一種邪宗らしき信仰あり。信者に道を伝うる
 ことはあれども、互いに嚴重なる秘密を守り、その作法^{さほう}につきて
 は親にも子にもいささかたりとも知らしめず。また寺とも僧とも
 少しも関係はなくて、在家^{ざいけ}の者のみの集^{あつ}まりなり。その人の数も
 多からず。辻^{はねいし}石たにえという婦人などは同じ仲間なり。阿弥陀^{あみだ}
 仏^{ぶつ}の齋^{さい}日^{にち}には、夜中人の静まるを待ちて会合し、隠れたる室^{きそう}
 にて祈^き禱^{とう}す。魔法まじないを善^よくする故に、郷党^{きやうたう}に対して一種の権
 威あり。

七二 栃^{とちない}内村^{うちむら}の字^{ことばた}琴畑^{ことばた}は深山の沢にあり。家の数は五軒ばか
 り、小鳥瀬^{こがらせ}川の支流の水^{みな}上^{なみ}なり。これより栃内^{とちない}の民居^{みんき}まで二里
 隔^{へだ}つ。琴畑^{ことばた}の入口に塚あり。塚の上には木の座像^{ざぞう}あり。およそ

人の大きさにて、以前は堂の中にありしが、今は雨ざらしなり。
これをカクラサマという。村の子供これをもてあそびもの玩物にし、引き出して川へ投げ入れまた路上を引きずりなどする故に、今は鼻も口も見えぬようになれり。或いは子供をある叱り戒めてこれを制止する者あれば、かえりて崇たたりを受け病むことありといえり。

○神体仏像子供と遊ぶを好みこれを制止するを怒りたもうことほかにも例多し。遠江小笠郡大池村東光寺の薬師仏（『掛川志』）、駿河安倍郡豊田村曲金の軍陣坊社の神（『新風土記』）、または信濃筑摩郡射手の弥陀堂みだどうの木仏（『信濃奇勝録』）などこれなり。

七三 カクラサマの木像は遠野郷のうちに数多あまたあり。栃内の字西に

しない

内にもあり。山口分の^{おおほら}大洞というところにもありしことを記

憶する者あり。カクラサマは人のこれを信仰する者なし。粗末な

る彫刻にて、^{いしょうかしら}衣裳頭^{かざり}の飾のありさまも不分明なり。

七四 枋内のカクラサマは右の大小二つなり。土淵一村にては三

つか四つあり。いずれのカクラサマも木の半身像にてなたの^{あらけ}荒

^ず削りの^{ぶかつこう}無恰好なるものなり。されど人の顔なりということだ

けは^わ分かるなり。カクラサマとは以前は神々の旅をして休息した

もうべき場所の名なりしが、その地に^{つね}常います神をかく^{とな}唱うるこ

ととなれり。

七五 ^{はなれもり}離森の長者屋敷にはこの数年前まで^{マッチ}燐寸の^{じくぎ}軸木の^{こうば}工場

ありたり。その小屋の戸口に^{よる}夜になれば女の伺い寄りて人を見て

げたげたと笑う者ありて、淋しさに堪えざる故、ついに工場を大字山口に移したり。その後また同じ山中に枕木伐出しのために小屋をかけたる者ありしが、夕方になると人夫の者いずれへか迷い行き、歸りてのち茫然としてあることしばしなり。かかる人夫四五人もありてその後も絶えず何方へか出でて行くことありき。この者どもが後に言うを聞けば、女がきて何処へか連れだすなり。歸りてのちは二日も三日も物を覚えずといえり。

七六 長者屋敷は昔時長者の住みたりし址なりとて、そのあたりにも糠森ぬかもりという山あり。長者の家の糠を捨てたるがなれるなりという。この山中には五つ葉いつばのうつ木ぎありて、その下に黄金を埋めてありとて、今もそのうつぎの有処ありかを求めあるく者稀まれまれ々にあ

り。この長者は昔の金山師なりしならんか、このあたりには鉄を吹きたる滓かすあり。恩徳おんどくの金山きんざんもこれより山続きにて遠からず。

○諸国のヌカ塚スクモ塚には多くはこれと同じき長者伝説を伴なえり。また黄金埋蔵の伝説も諸国に限りなく多くあり。

七七 山口の田尻たじり長三郎というは土淵村一番の物持ものもちなり。当主な

る老人の話に、この人四十あまりのころ、おひで老人の息子むすこ亡く

なりて葬式の夜、人々念仏を終りおのおの帰り行きし跡あとに、自分

のみは話はなし好きなれば少しあとになりて立ち出でしに、軒の雨落あまお

ちの石を枕にして仰臥ぎようがしたる男あり。よく見れば見も知らぬ人

にて死してあるようなり。月のある夜なればその光にて見るに、

膝ひざを立て口を開きてあり。この人大胆者にて足うづこにて揺かして見た

れど少しも身じろぎせず。道を妨^{さまた}げて外^{ほか}にせん方^{かた}もなければ、ついにこれを跨^{また}ぎて家に帰^{かへ}りたり。次の朝行きて見ればもちろんその跡^{あと}方^{かた}もなく、また誰^{ほか}も外^{ほか}にこれを見たりという人はなかりしかど、その枕にしてありし石の形と在^ありどころとは昨夜の見覚^{みおぼ}えの通りなり。この人の曰く、手をかけて見たらばよかりしに、半^{なか}ば恐ろしければただ足にて触^ふれたるのみなりし故、さらに何もののわざとも思いつかずと。

七八 同じ人の話に、家に奉公せし山口の長蔵なる者、今も七十余の老翁にて生存す。かつて夜遊びに出でて遅くかえり来たりしに、主人の家の門は大槌^{おおづち}往還に向いて立てるが、この門の前にて浜の方よりくる人に逢えり。雪合羽^{ゆきがっぱ}を着たり。近づきて立ち

とまる故、長蔵も怪しみてこれを見たるに、往還を隔てて向側なる畠地の方へすつと反れて行きたり。そかしこには垣根かきねありしはずなるにと思ひて、よく見れば垣根は正しくあり。まさ急に怖ろしくなりて家の内に飛び込み、主人にこの事を語りしが、のちになりて聞けば、これと同じ時刻に新張村にいばりむらの何某という者、浜よりの歸り途に馬より落ちて死したりとのことなり。

七九 この長蔵の父をもまた長蔵という。代々田尻家の奉公人にて、その妻とともに仕えてありき。若きころ夜遊びに出で、まだ宵よいのうちに歸り来たり、門かどの口より入りしに、洞前ほらまえに立てる人影あり。ふところ懐手をして筒袖つつそでの袖口を垂れ、顔は茫ぼうとしてよく見えず。妻は名をおつねといえり。おつねのところへ来たるヨバ

ヒトではないかと思ひ、つかつかと近よりしに、奥の方へは遁げずして、かえつて右手の玄関の方へ寄る故、人を馬鹿にするなど腹立たしくなりて、なお進みたるに、懷手のまま後あとずさりして玄関の戸の三寸ばかり明きたるところより、すつと内すきに入りたり。されど長蔵はなお不思議とも思はず、その戸の隙すきに手を差し入れて中を探らんとせしに、中の障子しょうじは正まさしく閉とぎしてあり。ここに始めて恐ろしくなり、少し引き下らんとして上を見れば、今の男玄関の雲壁くもかべにひたとつきて我を見下すごとく、その首は低く垂れてわが頭に触るるばかりにて、その眼の球は尺余も、抜け出でてあるように思われたりという。この時はただ恐ろしかりしのみにて何事の前兆にてもあらざりき。

○ヨバヒトは呼ばい人なるべし。女に思いを運ぶ人をかくいう。

○雲壁はなげしの外側の壁なり。

八〇 右の話をよく呑みこむためには、田尻氏の家のさまを図にする必要あり。遠野一郷の家の建てかたはいずれもこれと大同小異なり。

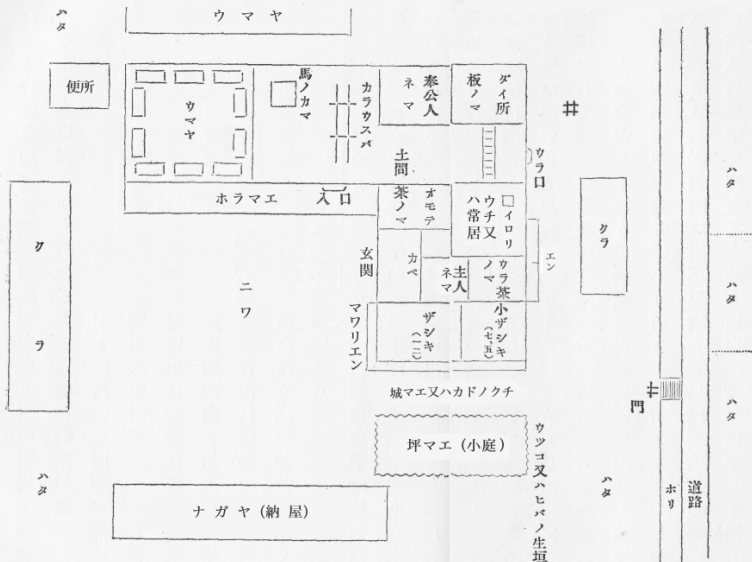
門はこの家のは北向きなれど、通例は東向きなり。右の図にて厩舎のあるあたりにあるなり。門のことを城前という。屋敷のめぐりは畠にて、囲墻を設けず。主人の寢室とウチとの間に小さく暗き室あり。これを座頭部屋という。昔は家に宴会あれば必ず座頭を喚びたり。これを待たせ置く部屋なり。

○この地方を旅行して最も心とまるは家の形の何れもかぎの手

なることなり。この家などそのよき例なり。

八一 枋内の字野崎のざきに前川万吉という人あり。二三年前に三十余にて亡くなりたり。この人も死ぬる二三年前に夜遊びに出でて歸りしに、門かどの口より廻り縁えんに沿いてその角かどまで来たるとき、六月の月夜のことなり、何なに心なく雲壁くもかべを見れば、ひととこれにつきて寝たる男あり。色の蒼あおざめたる顔なりき。大いに驚きて病みたりしがこれも何の前兆にてもあらざりき。田尻氏の息子丸吉この人と懇親にてこれを聞きたり。

八二 これは田尻丸吉という人が自ら遭あいたることなり。少年の頃ある夜常居じょういより立ちて便所に行かんとして茶の間に入りしに、座敷ざしきとの境に人立てり。幽かすかに茫としてはあれど、衣類しまの縞も眼



鼻もよく見え、髪をば垂^たれたり。恐ろしけれどそこへ手を延ばして探りしに、板戸にがたと突き当り、戸のさんにも触^{さわ}りたり。されどわが手は見えずして、その上に影のように重^{かさ}なりて人の形あり。その顔のところへ手を遣^やればまた手の上に顔見ゆ。常^{じょう}居^うに歸りて人々に話し、行^{あん}灯^{どん}を持ち行きて見たれば、すでに何ものもあらざりき。この人は近代的人にて怜^{れい}惻^じなる人なり。また虚言をなす人にもあらず。

八三 山口の大同、おおほらまんのじよう大洞万之丞の家の建てざまは少^ほしく外^かの家とはかわれり。その図次のページに出す。玄関は翼^{たつみ}の方に向かえり。きわめて古き家なり。この家には出して見れば崇^たありとて開かざる古文書の葛籠^{つづら}一つあり。

茶ノ間

台
ド
コ
ロ

ケ
グ
ラ
座

キ
ン
ス
リ
座

炉

横
座

常
居
又
ハ
ウ
チ

客
座

障
子

緑 雨 戸 側

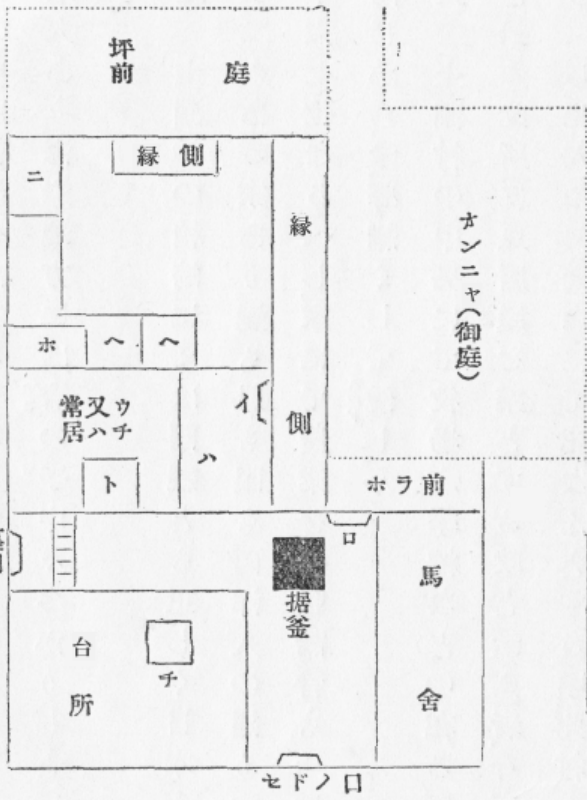
神
棚
カ
仏
壇

座
シ
キ

八四 佐々木氏の祖父は七十ばかりにて三四年前に亡くなりし人なり。この人の青年のころといえ、かえい嘉永の頃なるべきか。海岸の地には西洋人あまた来住してありき。かまいし釜石にも山田にも西洋館あり。ふなこし船越の半島の突端にも西洋人の住みしことあり。耶蘇ヤソ教は密々に行われ、遠野郷にてもこれを奉じてはりつけ磔になりたる者あり。浜に行きたる人の話に、異人はよく抱き合いてはな嘗め合う者なりなどいうことを、今でも話にする老人あり。海岸地方には合あいの子こなかなか多かりしということなり。

八五 土淵村の柏かしわざき崎にては両親とも正しく日本人にして白子しらこ二人ある家あり。髪も肌も眼も西洋人の通りなり。今は二十六七ぐらいなるべし。家にて農業をいとな営む。語音も土地の人とは同じか

イロハニホヘト
 玄関前茶仏仏寝ウ台
 関ノノダマチ所
 口マンン
 炉



オシニヤ(御庭)

川

裏口

川

らず、声細くして鋭し。するど

八六 土淵村の中央にて役場小学校などのあるところを字本もとじゆ

宿くという。此所に豆腐屋とうふやを業とする政という者、今三十六七な

るべし。この人の父大病にて死なんとするころ、この村と小鳥瀬こがらせ

川を隔てたる字下栃内しもとちないに普請ふしんありて、地固めの堂突どうづきをなすと

ころへ、夕方に政の父ひとり来たりて人々に挨拶あいさつし、おれも堂

突をなすべしとて暫時仲間に入りて仕事をなし、やや暗くなりて

皆とともに帰ったり。あとにて人々あの人は大病のはずなるにと

少し不思議に思いしが、後に聞けばその日亡くなりたりとのこと

なり。人々悔みに行き今日のことを語りしが、その時刻はあたか

も病人が息を引き取らんとするころなりき。

八七 人の名は忘れたれど、遠野の町の豪家にて、主人 おおわづら 大煩

いして命の境に臨みしころ、ある日ふと菩提寺 ぼだいじ に訪い來たれり。

和尚 おしょう 鄭重 ていちょう にあしらい茶などすすめたり。世間話 せけんばなし をしてや

がて帰らんとする様子に少々不審あれば、跡より小僧を見せに遣 やりしに、門を出でて家の方に向い、町の角 かど を廻りて見えずなれり。

その道にてこの人に逢 つね いたる人まだほかにもあり。誰にもよく挨

拶 てい して常の体 つね なりしが、この晩に死去してもちろんその時は外出

などすべき様態 ようたい にてはあらざりしなり。後に寺にては茶は飲み

たりや否やと茶碗を置きしところを改めしに、畳 たたみ の敷合 しきあ わせへ皆

こぼしてありたり。

八八 これも似たる話なり。土淵村大字土淵の常堅寺 じょうけんじ は曹洞 そうとう

しゅう

宗にて、遠野郷十二ヶ寺の触頭ふれがしらなり。或る日の夕方に村人

何某という者、本宿もとじゆくより来る路にて何某という老人にあえり。

この老人はかねて大病をして居る者なれば、いつのまによくなりしやと問うに、二三日気分も宜よろしければ、今日は寺へ話を聞きに

行くなりとして、寺の門前にてまた言葉を掛け合いて別れたり。常

堅寺にても和尚はこの老人が訪ね来たりし故出迎えゆえ、茶を進めし

ばらく話をして帰る。これも小僧に見させたるに門の外そとにて見え

ずなりしかば、驚きて和尚に語り、よく見ればまた茶は畳の間に

こぼしてあり、老人はその日失うせたり。

八九 山口より柏崎へ行くには愛宕山あたごやまの裾すそを廻まわるなり。田圃たんぼに

続ける松林にて、柏崎の人家見ゆる辺より雑木ぞうきの林となる。愛宕

山の頂いただきには小さき祠ほこらありて、参詣さんけいの路は林の中にあり。登のぼりく
 口ちとりいに鳥居立ち、一三十本の杉の古木あり。その旁かたわらにはまた一つ
 のがらんとしたる堂あり。堂の前には山神の字を刻みたる石塔を
 立つ。昔より山の神出づと言ひ伝うるところなり。和野わのの何某と
 いう若者、柏崎に用事ありて夕方堂のあたりを通りしに、愛宕山
 の上より降り来る丈高たけき人あり。誰ならんと思ひ林の樹木越しに
 その人の顔のところを目がけて歩み寄りしに、道の角かどにてはたと
 行き逢いぬ。先方は思ひ掛けざりしにや大いに驚きて此方を見た
 る顔は非常に赤く、眼は耀かがやきてかついかにも驚きたる顔なり。山
 の神なりと知りて後あとをも見ずに柏崎の村に走りつきたり。

○遠野郷には山神塔多く立てり、そのところはかつて山神に逢

いまたは山神の祟を受けたる場所にて神をなだむるために建てたる石なり。

九十 松崎村に天狗森てんぐもりという山あり。その麓なる桑くわばたけ 畠たけにて村の若者何某という者、働きていたりしに、頻しきりに睡ねむくなりたれば、しばらく畠くろの畔に腰掛けて居眠りせんとせしに、きわめて大なる男の顔は真赤まつかなるが出で来たり。若者は氣輕へいぜにて平生相撲など好きなる男なれば、この見馴みなれぬ大男が立ちはだかりて上より見下すようなるを面つら悪く思い、思わず立ち上りてお前はどこから来たかと問うに、何の答えもせざれば、一つ突き飛ばしてやらんと思い、力自慢ちからじまんのまま飛びかかり手を掛けたりと思うや否や、かえりて自分の方が飛ばされて氣を失いたり。夕方に正氣づきて

みれば無論その大男はおらず。家に歸りてのち人にこの事を話したり。その秋のことなり。早池峯の腰へ村人大勢とともに馬を曳ひきて萩はぎを刈はりに行き、さて歸らんとするころになりてこの男のみ姿見えす。一同驚きて尋ねたれば、深き谷の奥にて手も足も一つ一つ抜き取られて死していたりという。今より二三十年前のことにて、この時の事をよく知れる老人今も存在せり。天狗森には天狗多くいるということは昔より人の知るところなり。

九一 遠野の町に山々の事に明るき人あり。もとは南部男だんしやく爵くわく家の鷹たか匠じやうなり。町の人綽名あだなして鳥御前とりごぜんという。早池峯、六角牛の木や石や、すべてその形状と在あり処どころとを知れり。年取りてのち茸きのこ採りにとて一人の連つれとともに出でたり。この連の男と

いうは水練の名人にて、藁わらと槌つちとを持ちて水の中に入り、草鞋わらじを作りて出てくるという評判の人なり。さて遠野の町と猿ヶ石川を隔むけつる向え山やまという山より、綾織あやおり村の続つづき石いしとて珍しき岩のある所の少し上の山に入り、兩人別れ別れになり、鳥御前一人はまた少し山を登りしに、あたかも秋の空の日影、西の山の端はより四五間けんばかりなる時刻なり。ふと大なる岩の陰かげに赭あかき顔の男と女とが立ちて何か話をして居るに出逢であいたり。彼らは鳥御前の近づくを見て、手を拈ひろげて押し戻すようなる手つきをなし制止したれども、それにも構かまわず行きたるに女は男の胸むねに縋すがるようになり。事のさまより真の人間にてはあるまじと思ひながら、鳥御前はひょうきんな人なれば戯たわむれて遣やらんとて腰なる切刃きりはを抜き、打

ちかかるようにしたれば、その色赭き男は足を挙^あげて蹴^けりたるか
と思ひしが、たちまちに前後を知らず。連なる男はこれを探^{さが}しま
わりて谷底に氣絶してあるを見つけ、介抱して家に歸りたれば、
鳥御前は今日の一部始終を話し、かかる事は今までに更になきこ
となり。おのれはこのために死ぬかも知れず、ほかの者には誰に
もいふなと語り、三日ほどの間病みて身まかりたり。家の者あま
りにその死にやうの不思議なればとて、山^{やま}臥^{ぶし}のケンコウ院とい
うに相談せしに、その答へには、山の神たちの遊べるところを邪
魔したる故、その祟^{たた}をうけて死したるなりといえり。この人は伊
能先生なども知^{しり}合^{あい}なりき。今より十余年前の事なり。

九二 昨年のことなり。土淵村の里の子十四五人にて早池峯に遊

びに行き、はからず夕方近くなりたれば、急ぎて山を下り麓ふもと近く
なるころ、丈たけの高き男の下より急ぎ足に昇りくるに逢えり。色は
黒く眼まなこはきらきらとして、肩には麻かと思わるる古き浅葱色あさぎいろの
風呂敷ふろしきにて小さき包を負いたり。恐ろしかりしかども子供の中の
一人、どこへ行くかと此方より声を掛けたるに、小国おくにさ行くと答
う。この路は小国へ越ゆべき方角にはあらざれば、立ちとまり不
審するほどに、行き過ぐると思ふまもなく、はや見えなくなりたり。
山男よと口々に言いてみなみな遁げ歸りたりといえり。

九三 これは和野の人菊池菊蔵という者、妻は笛吹峠のあなたな
る橋野より来たる者なり。この妻親里へ行きたる間に、糸蔵とい
う五六歳の男の児病こ氣になりたれば、昼過ひるすぎより笛吹峠を越えて

妻を連れに親里へ行きたり。名に負う六角牛の峯続きなれば山路は樹深く、ことに遠野分より栗橋分へ下らんとするあたりは、路はウドになりて両方は岨そばなり。日影はこの岨に隠れてあたりやや薄暗くなりたるころ、後の方より菊蔵と呼ぶ者あるに振り返りて見れば、崖がけの上より下を覗くのぞものあり。顔は赭く眼の光りがやけること前の話のごとし。お前の子はもう死んで居るぞという。この言葉を聞きて恐ろしさよりも先にはつと思いたりしが、はやその姿は見えず。急ぎ夜の中に妻を伴ともないて歸りたれば、果して子は死してありき。四五年前のことなり。

○ウドとは両側高く切込みたる路のことなり。東海道の諸国にてウタウ坂・謡坂などいうはすべてかくのごとき小さき切通

しのことならん。

九四 この菊蔵、柏崎なる姉の家^{ふるま}に用ありて行き、振舞^{ふるま}われたる
残りの餅^{もち}を懷^{ふところ}に入れて、愛宕山の麓^{ふもと}の林を過ぎしに、象坪^{ぞうつば}の藤
七という大酒^{おおざけのみ}呑^{のみ}にて彼と仲善^{なかよし}の友に行き逢えり。そこは林の
中なれど少しく芝原^{しばはら}あるところなり。藤七はにこにことしてそ
の芝原^{ゆびさ}を指し、ここで相撲^{すもう}を取らぬかという。菊蔵これを諾し、
二人草原にてしばらく遊びしが、この藤七いかにも弱く軽く自由
に抱^{かか}えては投げらるる故^{ゆえ}、面白きままに三番まで取りたり。藤七
が曰く、今日はとてもかなわず、さあ行くべしとて別れたり。四
五間^{けん}も行きてのち心づきたるにかの餅見えず。相撲場に戻りて探
したれどなし。始めて狐ならんかと思いたれど、外聞を恥じて人

にもいわざりしが、四五日のち酒屋にて藤七に逢いその話をせしに、おれは相撲など取るものか、その日は浜へ行きてありしものをと言いて、いよいよ狐と相撲を取りしこと露顯したり。されど菊蔵はなお他の人々には包み隠してありしが、昨年の正月の休みに人々酒を飲み狐の話をせしとき、おれもじつはこの話を白状し、大いに笑われたり。

○象坪は地名にしてかつ藤七の名字なり。象坪という地名のこ
と『石神問答』^{いしがみもんどう}の中にてこれを研究したり。

九五 松崎の菊池某という今年四十三四の男、庭作りの上手^{じょうず}にて、山に入り草花を掘りてはわが庭に移し植え、形の面白き岩などは重^いきを厭^{いと}わず家に担^{にな}い帰るを常とせり。或る日少し気分重け

れば家を出でて山に遊びしに、今までついに見たることなき美しき大岩を見つけた。平生へいぜいの道楽なればこれを持ち帰らんと思ひ、持ち上げんとせしが非常に重し。あたかも人の立ちたる形して丈もやがて人ほどあり。されどほしさのあまりこれを負たけい、我慢して十間ばかり歩みしが、氣の遠くなるくらい重ければ怪しみをなし、路みちの旁かたわらにこれを立て少しくもたれかかるようにしたるに、そのまま石とともにずっと空中に昇のぼり行く心地こころしたり。雲より上になりたるように思ひしがじつに明るく清きところにて、あたりにいろいろの花咲き、しかも何処いずこともなく大勢の人声聞えたり。されど石はなおますます昇のぼり行き、ついには昇り切りたるか、何事も覚えぬようになりたり。その後時過ぎて心づきたる時は、や

はり以前のごとく不思議の石にもたれたるままにてありき。この石を家の内へ持ち込みてはいかなることあらんも測り^{はか}がたしと、恐ろしくなりて遁げ帰りぬ。この石は今も同じところにある。おりおりはこれを見て再びほしくなることありといえり。

九六 遠野の町に芳公馬鹿^{よしこうばか}とて三十五六なる男、白痴にて一昨年まで生きてありき。この男の癖は路上にて木の切れ塵^{ちり}などを拾い、これを捻^{ひね}りてつくづくと見つめまたはこれを嗅^かぐことなり。人の家に行きては柱などをこすりてその手を嗅ぎ、何ものにてても眼の先きまで取り上げ、にこにことしておりおりこれを嗅ぐなり。この男往来をあるきながら急に立ち留^{どま}り、石などを拾い上げてこれをあたりの人家に打ちつけ、けたたましく火事だ火事だと叫ぶこ

とあり。かくすればその晩か次の日か物を投げつけられたる家火を発せざることなし。同じこと幾度となくあれば、のちにはその家々も注意して予防をなすといえども、ついに火事を免れたる家は一軒もなしといえり。

九七 飯豊いいでの菊池松之丞まつのじようという人傷寒しょうかんを病み、たびたび息

を引きつめし時、自分は田圃に出でて菩提寺ぼだいじなるキセイ院へ急ぎ行かんとす。足に少し力を入れたるに、図らず空中に飛び上り、

およそ人の頭ほどのところを次第に前下りまえさがに行き、また少し力を入れるれば昇ること始めのごとし。何とも言われず快こころよし。寺の門

に近づくに人群集せり。何故なにゆえならんと訝いぶかりつつ門を入れば、紅くれないの芥子けしの花咲き満ち、見渡すかぎりも知らず。いよいよ心持よし。

この花の間に亡^なくなりし父立てり。お前もきたのかという。これに何か返事をしながらなお行くに、以前失いたる男の子おりて、トツチャお前もきたかという。お前はここにいたのかと言いつつ近よらんとすれば、今きてはいけないという。この時門の辺にて騒しくわが名を喚^よぶ者ありて、うるさきこと限りなけれど、よんどころなければ心も重くいよいよながら引き返したりと思えば正氣づきたり。親族の者寄り集^{つど}い水など打ちそそぎて喚^よび生^いかしたるなり。

九八 路の傍に山の神、田の神、塞^{さえ}の神の名を彫りたる石を立つるは常のことなり。また早池峯山・六角牛山の名を刻したる石は、遠野郷にもあれど、それよりも浜にことに多し。

九九 土淵村の助役北川清という人の家は字火石^{ひいし}にあり。代々の山^{やまぶし}臥^{ふし}にて祖父は正福院といい、学者にて著作多く、村のために尽したる人なり。清の弟に福二という人は海岸の田の浜へ婿^{むこ}に行きたるが、先年の大海^{おおつなみ}嘯^{なみ}に遭いて妻と子とを失い、生き残^{もと}りたる二人の子とともに元の屋敷の地に小屋を掛けて一年ばかりありき。夏の初めの月夜に便所に起き出でしが、遠く離れたところ^{なみ}にありて行く道も浪^{なみ}の打つ渚^{なぎさ}なり。霧の布^しきたる夜なりしが、その霧の中より男女二人の者の近よるを見れば、女は正^{まさ}しく亡^なくなりしわが妻なり。思わずその跡をつけて、遙^{はるばる}々と船^{ふなこし}越村の方へ行く崎の洞^{ほころ}あるところまで追^おい行き、名を呼^よびたるに、振り返^{かへ}りてにこと笑^{わら}いたり。男はとみればこれも同じ里の者にて海嘯^{かいしやう}の

難に死せし者なり。自分が婿に入りし以前に互いに深く心を通わ
せたりと聞きし男なり。今はこの人と夫婦になりてありというに、
子供は可愛くはないのかといえ、女は少しく顔の色を変えて泣
きたり。死したる人と物いうとは思われずして、悲しく情なくな
りたれば足元あしもとを見てありし間に、男女は再び足早にそこを立ち
退きて、小浦へ行く道の山陰やまかげを廻り見えなかりたり。追いか
けて見たりしがふと死したる者なりしと心づき、夜明けまで道中みちなか
に立ちて考え、朝になりて帰ったり。その後久しく煩わづらいたりとい
えり。

一〇〇 船越の漁夫何某。ある日仲間の者とともに吉利吉里きりきりより
帰るとて、夜深く四十八坂のあたりを通りしに、小川のあるところ

ろにて一人の女に逢う。見ればわが妻なり。されどもかかる夜中にひとりこの辺に來^くべき道理なければ、^{ひつじょう}必定^{ばげもの}化物ならんと思ひ定め、やにわに魚切^{うおきりばうちよう}庖丁を持ちて後の方より差し通したれば、悲しき声を立てて死したり。しばらくの間は正体を現わさざれば流石^{さすが}に心に懸^あり、後の事を連^{つれ}の者に頼み、おのれは馳せて家に歸りしに、妻は事もなく家に待ちてあり。今恐ろしき夢を見たり。あまり歸りの遅ければ夢に途中まで見に出でたるに、山路にて何とも知れぬ者に脅^{おびや}かされて、命を取らるると思ひて目覺めたりという。さてはと合点^{がてん}して再び以前の場所へ引き返してみれば、山にて殺したりし女は連の者が見ておる中^{なかつ}に一匹^{きつね}の狐となりたりといえり。夢の野山を行くにこの獣の身を傭^{やと}うことあ

りに見ゆ。

一〇一 旅人豊間根村を過ぎ、夜更け疲れたれば、知音の者の家に灯火の見ゆるを幸に、入りて休息せんとせしに、よき時に来合せたり、今夕死人あり、留守の者なくていかにせんかと思ひしところなり、しばらくの間頼むといいて主人は人を喚びに行きたり。迷惑千万なる話なれど是非もなく、囲炉裡の側にて煙草を吸いてありしに、死人は老女にて奥の方に寝させたるが、ふと見れば床の上にむくむくと起き直る。胆潰れたれど心を鎮め静かにあたりを見廻すに、流し元の水口の穴より狐のごとき物あり、面をさし入れて頻に死人の方を見つめていたり。さてこそと身を潜め窺かに家の外に出で、背戸の方に廻りて見れば、正しく狐にて

首を流し元の穴に入れ後足あとあしを爪つまた立てていたり。有あり合あわせたる棒をもてこれを打ち殺したり。

○下閉伊郡豊間根村大字豊間根。

一〇二 正月十五日の晩を小正月こしょうがつという。宵よいのほどは子供ら福の神と称して四五人群を作り、袋を持ちて人の家に行き、明あけの方から福の神が舞い込んだと唱となえて餅もちを貰もらう習慣あり。宵を過ぐればこの晩に限り人々決して戸の外に出づることなし。小正月の夜半過ぎは山の神出でて遊ぶと言いい伝えてあればなり。山口の字丸ま古立るこたちにおまさという今三十五六の女、まだ十二三の年のことなり。いかなるわけにてか唯一人にて福の神に出で、ところどころをあるきて遅くなり、淋さびしき路を帰りしに、向うの方より丈たけの高

き男来てすれちがいたり。顔はすてきに赤く眼はかがやけり。袋を捨てて遁げ帰り大いに煩いたりといえり。

一〇三 小正月の夜、または小正月ならずとも冬の満月の夜は、雪女が出でて遊ぶともいう。童子をあまた引き連れてくるといえり。里の子ども冬は近辺の丘に行き、櫓そりつこあそ遊びをして面白さのあまり夜になることあり。十五日の夜に限り、雪女が出るから早く帰れと戒めらるるは常のことなり。されど雪女を見たりという者は少なし。

一〇四 小正月の晚には行事はなは甚だ多し。月見つきみというは六つの胡桃くるみの実みを十二に割り一時いつときに炉ろの火にくべて一時にこれを引き上げ、一列にして右より正月二月と数うるに、満月の夜晴なるべき月に

はいつまでも赤く、曇るべき月には直に黒くなり、風ある月にはフーフーと音をたてて火が振うなり。ふる何遍繰り返しても同じことなり。村中いずれの家にも同じ結果を得るは妙なり。翌日はこの事を語り合い、例えば八月の十五夜風とあらば、その歳の稲のかりいれ刈入を急ぐなり。

○五穀の占、月の占多少のヴァリエテをもつて諸国に行なわる。
おんようどう陰陽道に出でしものならん。

一〇五 また世中見よなかみというは、同じく小正月の晩に、いろいろの米にて餅をこしらえて鏡となし、同種の米を膳ぜんの上に平たいらに敷き、
 鏡かがみもち餅をその上に伏せ、鍋なべを被かぶせ置きて翌朝これを見るなり。
 餅につきたる米粒こめつぶの多きものその年は豊作なりとして、早中晩

の種類を択び定むるなり。

一〇六 海岸の山田にては蜃氣楼^{しんきろう}年々見ゆ。常に外国の景色なりという。見馴^{みな}れぬ都のさまにして、路上の車馬しげく人の往来眼ざましきばかりなり。年ごとに家の形などいささかも違うことなしといえり。

一〇七 上郷村に河ぶちのうちという家あり。早瀬川の岸にあり。この家の若き娘、ある日河原に出でて石を拾いてありしに、見馴^{みな}れぬ男来たり、木の葉とか何とかを娘にくれたり。丈高^{たけ}く面朱^{しゆ}のようなる人なり。娘はこの日より占^{うらない}の術を得たり。異人は山の神にて、山の神の子になりたるなりといえり。

一〇八 山の神の乗り移りたりとて占をなす人は所々にあり。附^つ

くもうし

馬牛村にもあり。本業は木挽こびきなり。柏崎の孫太郎もこれなり。

以前は発狂して喪心したりしに、ある日山に入りて山の神よりその術を得たりしのちは、不思議に人の心中を読むこと驚くばかりなり。その占いの法は世間の者とは全く異なり。何の書物をも見ず、頼みにきたる人と世間話をなし、その中にふと立ちて常居じょういの中をなかあちこちとあるき出すと思うほどに、その人の顔は少しも見ずして心に浮びたることをいうなり。当らずということなし。

例えばお前のウチの板敷いたじきを取り離し、土を掘りて見よ。古き鏡または刀の折れあるべし。それを取り出さねば近き中に死人ありとか家が焼くるとかいうなり。帰りて掘りて見るに必ずあり。かかる例は指を屈するに勝たえず。

一〇九 盆のころには雨風祭とて藁わらにて人よりも大なる人形にんぎようを作り、道の岐ちまたに送り行きて立つ。紙にて顔を描えがき瓜うりにて陰陽の形を作り添えなどす。虫祭の藁人形にはかかることはなくその形も小さし。雨風祭の折は一部落の中にて頭屋とうやを扱えらび定め、里人さとびと集まりて酒を飲みてのち、一同笛太鼓ふえたいこにてこれを道の辻まで送り行くなり。笛の中には桐きりの木にて作りたるホラなどあり。これを高く吹く。さてその折の歌は「二百十日の雨風まつるよ、どちらの方さ祭る、北の方さ祭る」という。

○『東国輿地勝覧』によれば韓国にても厲壇れいだんを必ず城の北方に作ること見ゆ。ともに玄武神の信仰より来たれるなるべし。

一一〇 ゴンゲサマというは、神楽舞かぐらまいの組ごとに一つずつ備わ

れる木彫きぼりの像にして、獅子頭ししがしらとよく似て少しく異ことなれり。甚だ御利生ごりしょうのあるものなり。新張にいばりの八幡社の神楽組のゴンゲサマと、土淵村字五日市いつかいちの神楽組のゴンゲサマと、かつて途中にて争いをなせしことあり。新張のゴンゲサマ負けて片耳かたみみを失いたりとて今もなし。毎年村々を舞いてあるく故、これを見知らぬ者なし。ゴンゲサマの靈驗れいげんはことに火伏ひふせにあり。右の八幡の神楽組かつて附馬牛村に行きて日暮ひぐれ宿を取り兼ねしに、ある貧しき者の家にて快くこれこころよを泊とめて、五升ます榊を伏せてその上にゴンゲサマを座すえ置き、人々は臥ふしたりしに、夜中にがつがつと物を噛かむ音のするに驚きて起きてみれば、軒端のきばたに火の燃えつきてありしを、榊の上なるゴンゲサマ飛び上り飛び上りして火を喰くい消して

ありしなりと。子どもの頭を病む者など、よくゴンゲサマを頼み、その病を噛みてもらうことあり。

一一一 山口、飯豊、附馬牛の字荒川東禅寺および火渡ひわたり、青笹の字中沢ならびに土淵村の字土淵に、ともにダンノハナという地名あり。その近傍にこれと相對して必ず蓮台野れんたいのという地あり。

昔は六十を超えたる老人はすべてこの蓮台野へ追ひ遣るならいの習ありき。老人はいたずらに死んで了しまうこともならぬ故に、日中は里へ下り農作して口を糊ぬらしたり。そのために今も山口土淵辺にては朝あしたに野らに出づるをハカダチといい、夕方野らより帰ることをハカアガリというといえり。

○ダンノハナは壇の塙なるべし。すなわち丘の上にて塚を築き

たる場所ならん。境の神を祭るための塚なりと信ず。蓮台野

もこの類なるべきこと『石神問答』中にいえり。

一二 ダンノハナは昔館たてのありし時代に囚人を斬きりし場所なる

べしという。地形は山口のも土淵飯豊のもほぼ同様にて、村境の

岡の上なり。仙台にもこの地名あり。山口のダンノハナはおおほら大洞

へ越ゆる丘の上にて館たてあと址よりの続きなり。蓮台野はこれと山口

の民居を隔てて相對す。蓮台野の四方はすべて沢なり。東はすな

わちダンノハナとの間の低地、南の方を星谷という。此所には蝦え

夷屋敷ぞやしきという四角に凹へこみたるところ多くあり。その跡あときわめて明

白なり。あまた石器を出す。石器土器の出るところ山口に二ヶ所

あり。他の一は小字こあざをホウリヨウという。ここの土器と蓮台野の

土器とは様式全然殊なり。こと後者ののは技巧いささかもなく、ホウリ
 ヨウのは模様なども巧なり。もよう埴輪もここより出づ。また石斧石刀
 の類も出づ。蓮台野には蝦夷錢えぞせんとて土にて錢の形をしたる径二寸
 ほどの物多く出づ。これには單純なる渦紋うずもんなどの模様あり。字
 ホウリヨウには丸玉・管玉くだたまも出づ。ここの石器は精巧にて石の
 質も一致したるに、蓮台野のは原料いろいろなり。ホウリヨウの
 方は何の跡ということもなく、狭き一町歩いっちようぶほどの場所なり。星
 谷は底の方かた今は田となれり。蝦夷屋敷はこの両側に連なりてあり
 しなりという。このあたりに掘れば崇たありという場所二ヶ所ほど
 あり。

○ほか外の村々にても二所の地形および關係これに似たりという。

○星谷という地名も諸国にあり星を祭りしところなり。

○ホウリヨウ権現は遠野をはじめ奥羽一円に祀らるる神なり。

蛇の神なりという。名義を知らず。

一一三 和野にジョウツカ森というところあり。象を埋めし場所なりといえり。此所だけには地震なしとて、近辺にては地震の折はジョウツカ森へ遁げよと昔より言い伝えたり。これは確かに人を埋めたる墓なり。塚のめぐりには堀あり。塚の上には石あり。これを掘れば崇たたりありという。

○ジョウズカは定塚、庄塚または塩塚などとかきて諸国にあまたあり。これも境の神を祀りしところにて地獄のショウツカだつえばの奪衣婆の話などと関係あること『石神問答』に詳つまびらかにせり。

また象坪などの象頭神とも関係あれば象の伝説は由^{よし}なきにあらず、塚を森ということも東国の風なり。

一一四 山口のダンノハナは今は共同墓地なり。岡の頂上にうつ木を栽^うえめぐらしその口は東方に向かいて門口^{もんぐち}めきたるところあり。その中ほどに大なる青石あり。かつて一たびその下を掘りたる者ありしが、何ものをも発見せず。のち再びこれを試みし者は大なる瓶^{かめ}あるを見たり。村の老人たち大いに叱^{しか}りければ、またもとのままになし置きたり。館^{たて}の主の墓なるべしという。此所に近き館の名はボンシャサの館という。いくつかの山を掘り割りて水を引き、三重四重に堀を取り廻^{めぐ}らせり。寺屋敷・砥石^{といし}森^{もり}などいう地名あり。井の跡とて石垣^{いしがき}残れり。山口孫左衛門の祖先ここ

に住めりという。『遠野古事記』とおのこじき つまびらに詳かなり。

一一五 おとぎばなし 御伽話のことを昔々むかしむかしという。ヤマハハの話最も多

くあり。ヤマハハは山姥やまうばのことなるべし。その一つ二つを次に記すべし。

一一六 昔々あるところにトトとガガとあり。娘を一人持てり。

娘を置いて町へ行くとて、誰がきても戸を明けるなと戒しめ、鍵かぎ

を掛けて出でたり。娘は恐ろしければ一人炉にあたりすくみてい

たりしに、真昼間まひるまに戸を叩きてここを開けと呼ぶ者あり。開かず

ば蹴破けやぶるぞと嚇おどす故に、是非なく戸を明けたれば入りきたるはヤ

マハハなり。炉の横座よこざに蹈ふみはたかりて火にあたり、飯をたきて

食わせよという。その言葉に従い膳ぜんを支度してヤマハハに食わせ、

その間に家を遁げ出したるに、ヤマハハは飯を食い終りて娘を追
い来たり、おいおいにその間あいだ近く今にも背せなに手の触ふるばかりに
なりし時、山の蔭かげにて柴しばを苅る翁に逢う。おれはヤマハハにぼつ
かけられてあるなり、隠かくしてくれよと頼み、苅り置きたる柴の中
に隠れたり。ヤマハハ尋ね来たりて、どこに隠れたかと柴たばの束を
のけんとして柴かかを抱えたるまま山より滑すべり落ちたり。その隙ひまにこ
こを遁のがれてまた萱かやを苅る翁に逢う。おれはヤマハハにぼっかけら
れてあるなり、隠してくれよと頼み、苅り置きたる萱の中に隠れ
たり。ヤマハハはまた尋ね来たりて、どこに隠れたかと萱の束を
のけんとして、萱を抱えたるまま山より滑り落ちたり。その隙に
またここを遁れ出でて大きな沼の岸に出でたり。これよりは行

くべき方もなければ、沼の岸の大木の梢に昇りいたり。ヤマハハはどけえ行つたとて遁がすものかとて、沼の水に娘の影の映れるを見てすぐに沼の中に飛び入りたり。この間に再び此所を走り出で、一つの笹小屋のあるを見つけ、中に入りて見れば若き女いた。此にも同じことを告げて石の唐櫃のありし中へ隠してもらいたるところへ、ヤマハハまた飛び来たり娘のありかを問えども隠して知らずと答えたれば、いんね来ぬはずはない、人くさい香がするものという。それは今雀を炙つて食つた故なるべしと言え、ヤマハハも納得してそんなら少し寝ん、石のからうどの中にしようか、木のからうどの中がよいか、石はつめたし木のからうどの中と言いて、木の唐櫃の中に入りて寝たり。家の女はこ

れに鍵かぎを下し、娘を石のからうどより連れ出し、おれもヤマハハに連れて来られたる者なればともどもにこれを殺して里へ帰らんとて、錐きりを紅あかく焼きて木の唐櫃はつかねずみの中に差し通したるに、ヤマハハはかくとも知らず、ただ二十日鼠そそがきたと言えり。それより湯を煮に立てて焼やき錐きりの穴より注そそぎ込みて、ついにそのヤマハハを殺し二人ともに親々の家に帰ったり。昔々の話の終りはいずれもコレデドンドハレという語をもつて結ぶなり。

一一七 昔々これもあるところにトトとガガと、娘の嫁に行く支度を買いに町へ出で行くとて戸を鎖とぎし、誰がきても明けるなよ、はアと答えたれば出でたり。昼のころヤマハハ来たりて娘を取りて食い、娘の皮を被かぶり娘になりておる。夕方二人の親歸りて、お

りこひめこ居たかと門の口より呼べば、あ、いたます、早かつたなしと答え、一二親ふたおやは買いかたりしいろいろの支度の物を見せて娘よろこの悦ぶ顔を見たり。次の日夜よの明けたる時、家の鶏羽はばたきして、糠屋ぬかやの隅すみツ子こ見ろじや、けけろと啼なく。はて常つねに變りたる鶏の啼きようかなと一二親ふたおやは思いたり。それより花嫁を送り出すとてヤマハハのおりこひめこを馬に載せ、今や引き出さんとするときまた鶏啼く。その声は、おりこひめこを載せなえでヤマハハのせた、けけろと聞ゆきこ。これを繰り返して歌いしかば、二親も始めて心づき、ヤマハハを馬より引き下おろして殺したり。それより糠屋の隅を見に行きしに娘の骨あまた有ありたり。

○糠屋は物おきなり。

一一八 紅皿 欠皿 皿の話も遠野郷おこに行なわる。ただ欠皿の方は

その名をヌカボという。ヌカボは空穂うつぼのことなり。継母まははに悪にくま

れたれど神の恵めぐみありて、ついに長者の妻となるという話なり。エ

ピソードにはいろいろの美しき絵様えようあり。折おりあらば詳しく書き記

すべし。

一一九 遠野郷の獅子踊ししおどりに古くより用いたる歌の曲あり。村に

より人によりて少しずつの相異あれど、自分の聞きたるは次のごとし。百年あまり以前の筆写なり。

○獅子踊はさまでこの地方に古きものにあらず。中代これを輪
入せしものなることを人よく知れり。

橋ほめ

一 まるり来て此橋を見申せや、いかなもをぎは踏みそめたや
 ら、わだるがくかいざるもの

一 此御馬場を見申せや、杉原七里大門まで

門ほめ

一 まるり来て此もんを見申せや、ひの木さわらで門立てゝ、
 是ぞ目出たい白かねの門

一 門の戸びらおすひらき見申せや、あらの御せだい

○

一 まるり来てこの御本堂を見申せや、いかな大工は建てたや
 ら

一 建てた御人^{おひと}は御手とから、むかしひたのたくみの立てた寺也^{なり}

小島ぶし

一 小島ではひの木さわらで門^{かど}立てゝ、是ぞ目出たい白金^{しろかね}の門

一 白金の門戸^{むね}びらおすひらき見申せや、あらの御^おせだい

一 八つ棟^{むね}ぢくり^{かみ}にひわだぶきの、上^{かみ}におひたるから松

一 から松のみぎり左に涌^わくいぢみ、汲^のめども吞^のめどもつきひ
ざるもの

一 あさ日さすよう日かゞやく大寺^{おおてら}也、さくら色のちごは百人

一 天からおづるちよ硯水すずりみず、まつて立たれる

馬屋まやほめ

一 まゐり来てこの御台みだい所見申せや、め釜がまを釜に釜は十六

一 十六の釜で御代ごよたく時は、四十八の馬で朝草あさくさ苅る

一 其馬そので朝草にききやう小萱こがやを苅りまぜて、花でかゞやく馬

屋なり

一 かゞやく中のかげ駒こまは、せたいあがれを足あがきする

○

一 此庭に歌のぞうじはありと聞く、あしびながらも心はづかし

一 われくはきによならひしけふあすぶ、そつ事ごめんなり

一 しやうち申せや限^{かぎり}なし、一礼申して立てや友だつ

榊形ほめ

一 まりり来てこの榊^{ます}を見申せや、四方四角榊形の庭也
 一 まりり来て此宿^{やど}を見申せや、人のなさげの宿と申^{もうす}

町ほめ

一 参^{まい}り来て此お町を見申せや、豎^{たて}町十五里横七里、△△出
 羽にまよおな友たつ

○出羽の字もじつは不明なり。

けんだんほめ

一 まりり来てこのけんだん様^{さま}を見申せや、御町間^{おんまちまなか}中^なにはた
 を立^{たて}前^{まえ}

一 まいは立町たてまちあぶらまち油町

一 けんだん殿は二かい座敷に昼寝すて、銭ぜにを枕に金の手遊てあそび

一 参り来てこの御札ふだ見申せば、おすがいろぢきあるまじき札

一 高き処ところは城と申し、ひくき処しろは城下しょうかと申す也

橋ほめ

一 まゐり来てこの橋を見申せば、こ金かねの辻つじに白金のはし

上ほめ

一 まゐり来てこの御堂おどう見申せや、四方四面くさび一本

一 扇おうぎとりすゞ取り、上かみさ参らばりそうある物

○すゞは数珠じゆず、りそうは利生か。

家ほめ

一 こりばすらに小^{こが}金のたる木に、水のせ懸^{がく}るぐしになみたち

○こりばすら文字不分明。

なみあい
浪合

一 此庭に歌の上^{じよう}ずはありと聞く、歌へながらも心はづかし

一 おんげんべりこおらいべり、山と花^こごぎ是の御庭へさらゝ

すかれ

○雲縹縁、高麗縁なり。

一 まぎゑの台に玉のさかすきよりすゑて、是の御庭へ直し置

く

一 十七はちやうすひやけ御手^{おて}にもちをすやく廻^{まわし}や御庭かゝや

く

一 この御酒^{ごしゅ}一つ引受^{ひきうけ}たもるなら、命長くじめうさかよる

一 さかなには鯛^{たい}もすゞきもござれ共^{ども}、おどにきこいしからの
かるうめ

一 正^{しょう}ぢ申や限なし、一礼申て立や友たつ、京^{みやこ}

柱懸り

一 仲だぢ入れよや仲入れろ、仲たづなけれや庭はすんげない

一 すかの子は生れておりれや山めぐる、我等も廻^{まわ}る庭めぐる

○すかの子は鹿の子なり。遠野の獅子踊の面は鹿のような

り。

一 これの御庭におい柱の立つときは、ちのみがき若くなるもの

○ちのみがきは鹿の角磨つのみがきなるべし。

一 松島の松をそだてゝ見どすれば、松にからするちたのえせもの

○ちたは蔦つた。

一 松島の松にからまるちたの葉も、えんが無なれやぶろりふぐれる

一 京で九貫のから絵のびよぼ、三よへにさらりたてまはす

○びよぼは屏風びようぶなり。三よへは三四重か、この歌最もお

もしろし。

めず ぐり

一 仲たち入れろや仲入れろ、仲立なけれや庭すんげなえ

○めず ぐりは鹿の妻つまえら扱あびなるべし。

一 鹿の子は生れおりれや山廻る、我らもめぐる庭を廻るな
 一 女鹿めしかたづねていかんとして白山はくさんの御山かすみかゝる

○して、字はメ《しめ》てとあり。不明

一 うるすやな風はかすみを吹き払て、今こそ女鹿あけてたち
 ねる

○うるすやなは嬉うれしやななり。

一 何と女鹿はかくれてもひと村すゝきあけてたつねる
 一 笹ささのこののは女鹿めじし子は、何とかくてもおひき出さる

一 女鹿大鹿ふりを見ろ、鹿の心みやこなるもの

一 奥のみ山の大鹿はことすはじめておどりでそろそろ候

一 女鹿とらてあうがれて心ぢくすくをろ鹿かな

一 松島の松をそだてゝ見とすれば松にからまるちたのえせもの

一 松島の松にからまるちたの葉も、えんがなけれやぞろりふぐれる

一 沖ちゆうのと中の浜す鳥、ゆらりこがれるそろりたつ物

なげくさ

一 なげくさを如何いかなおひと御人は御出おいであつた、出た御人は心ありがた

い

一 この代を如何な大工は御指しあた、四つ角て宝遊ばし

一 この御酒を如何な御酒だと思し召す、おどに聞いしが 菊

の酒

一 此このせに錢を如何な錢たと思し召す、伊勢お八まち錢熊野参

の遣つかひあまりか

一 此紙を如何な紙と思し召す、はりまだんぜかかしま紙か、

おりめにそたひ遊はし

はりまだんし
○播磨檀紙にや。

一 あふぎのお所いぢくなり、あふぎの御所三内の宮、内てす
めるはかなめなり、おりめにそたかさなる

○いぢくなりはいずこなるなり。三内の字不明。仮かりにかく

よめり。

青空文庫情報

底本：「遠野物語・山の人生」岩波文庫 岩波書店

1976（昭和51）年4月16日第1刷発行

2007（平成19）年10月4日第47刷改版発行

2010（平成22）年3月5日第50刷発行

※図版は、「遠野物語増補版」郷土研究社、1935（昭和10）年7月31日発行からとりました。

入力：Nana ohbe

校正：阿部哲也

2012年12月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

遠野物語

柳田国男

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>